
Wing Lei

間宮 ナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wing Lei

【Nコード】

N0553T

【作者名】

間宮 ナナ

【あらすじ】

今日、天地が生まれてから数万年が経とうとしていた。時は遡り今より数千年前、この星は一度終焉へと導かれた。混沌より生まれし悪しき塊“霸王”の手によって。しかし世界は救われた、たった一人の“勇者”によって。そして……今、世界は再び終焉へと導かれようとしていた。幾代もの時を超え受け継がれる“勇者”より託されし輝き“栄光の灯”を持つ者たちは立ち上がる！ 立ち上がるは“霸王”より生まれし悪しき者たち……。悲劇となるか、喜劇となるか……今、新たな時代に戦乱の風が吹く！

opening(前書き)

どうも初めまして。

まずこのページを開いていただきありがとうございます。

作者が全くのトーションローの為文章中お見苦しい点があるかもしれませんが、

付き合っていたただけたら光栄です。

初回から専門用語的なものが多々あり混乱してしまうかもしれませんが、

その点はやさしい目で見てやってください。

前書きはここ依頼しばらくは書かないです(後書きは全くかきませ
ん)

ではよろしく願います。

opening

昔々……、とあるところに一人の“勇者様”が現れましたとさ。“勇者様”は村の人から世界を終焉へと導く“霸王様”の存在を聞き退治しに行く事になりました。幾つもの試練を乗り越えた“勇者様”はとうとう“霸王様”のもとへとたどり着く事が出来ました。それから“勇者様”と“霸王様”は終わらぬ死闘を1000余年もの間闘い続けました。そしてとうとうその戦いに終わりが来たのです。“勇者様”は己の身ごと“霸王様”を封印することにしたのです。封印は無事に成功し、“勇者様”は“霸王様”の封印が解かれる事のないように死の間際に世界へ封印の力、すなわち己の力を分散しましたとさ。そして終焉を迎えていた世界は“霸王様”の封印と共に秩序に保たれましたとさ……。

第一話 聖なる軍団

まだ陽が天高い時、とあるオリエンタルな街中を半ば強引に人混み分けて進む、中学生くらいのまだ幼さ残る白装束を纏った少年がいた。

「くっそ！どこ行きやがった!？」

視界狭いの中必死に辺りを見回す少年の眼からは、やや焦りが見えた。その時少年の瞳は目的の対象物を捕えた。

「みつけ!」

僅かな笑みを見せると、少年は白銀の髪を靡かせ対象目がけて走りだす。進行方向には観光ツアーかなにかの二、三十人の団体が完全に道を遮った。

「ワリイ！退いてくれ!!」

到底、全員が全員素早く反応できるわけなく、四、五割程度が身を退く程度だった。

「クッソ……!!」

少年は仕方なしに団体の直前で固く舗装された地面を蹴りつけ、十メートルちよいの列を身を翻して飛び越えた。その少年の存在に気付いた当事者は、周りと至って変わらぬ人間の格好をしているが、気付くや否や人混みに紛れるように身を隠す。

人気のない細い裏路地まで逃げ込むと、冷たいコンクリの建物の外壁に手をつつかえ棒にしてより掛かった。息は荒く、所々擬態していた人の皮膚が剥がれ始め、内側の姿が露あらわに成り始める。

「鬼ゴこつこは終わりか？“黒魔”^{アザム}？」

「!？」

黒魔と呼ばれるものは慌て、驚き頭上を見上げる。そこには眩しく刺さる太陽の光を背に、建物の屋根に腰がける先程の少年がいた。一つ笑みを見せると少年は壁を一蹴りし黒魔目がけて高架した。

表通りには地元の通行人や観光団体が平穏な空気の中いるが、その空気は爆発音と共に一瞬にして変化する。裏路地道からは土煙が立ち昇り、たちまち表通りの視界を奪う。その土煙から第一に姿を見せたのは人の化けの皮剥がれた黒魔だった。その体表は禍々しい黒の渦が巻いており、眼は餌に飢えたような獣の目をしていて。獣の如く喉を鳴らし人間たちへ目を向ける。その時もう一つ土煙から飛び出して来る者がいる、白装束の少年だ。少年の右腕は蒼白の光が灯り、四方八方へ光を放っている姿だった。

「逃げる！！」

その声は突然の出来事に戸惑う者たちへと向けられる。危険を察知した者は早々にその場から離れたが、察知するが思うように体が動かない者その場に留まってしまふ。先程の観光グループは高齢者が大半の為、後者となってしまう者が多く、二十代前半の女性ガイドも付き添う形で留まってしまった。喉を高鳴らせる黒魔はその者たちへと攻撃の手を伸ばした。女性ガイドは死と言う恐怖の中、自分の身を高齢者の盾とする。しかし黒魔の攻撃から数秒が経つが、自分の身に何も起きない事に気付くと伏せていた顔をゆっくりと上げた。

「ごくろーさん！早く行きな」

女性ガイドと黒魔の間には少年が仲介として入っていた。その時、少年の白装束の背に見た物は、七色の糸で刺繍された花だった。その刺繍された花がこの世界でどういう存在かは多くのものが知っている。

アルカディア
“ 聖なる軍団 ”

かつて、世界を一度終焉へと導こうとした混沌より生まれし悪しき者“霸王”を、たった一人で打倒した“勇者”が封印が二度と解かれぬよう世界へと託した力を授かりし者の集まり。

「さーて……、街の人も避難したみてーだし、さっきの借りは……返さしてもらうぜ!!」

右手の蒼白の輝きは少年の意志に従う様により強く輝く。

“アクティヴァ
栄光の灯”

これが少年が持つ光る拳の正体であり、“勇者”より長き年月を経て託された力。力の形状は様々で武器に変換させる者もいれば少年の様に己の身に力を宿す者もいる。

地面を力いっぱい蹴ると、少年は一気に黒魔との間合いを詰め、右の拳を黒魔の顔へと持っていく。速さと力に圧倒された黒魔は地面に叩きつけられながら数回転の後止まり、鋭く尖る歯が覗く口を大きく開き、そこに赤い火球の様なものを作り始める。一定の大きさにまで作ると、体を仰け反らせ勢い良く吐き出した。

「二度も喰らうかよ!!」

少年は放たれた火球を輝く右手で受け止め、握り潰すかのように振り払った。残り火が辺りをゆらゆらと散る中、黒魔は最大火力の火球を打つ構えをとっていた。少年はその火球を成型していく僅かな時間に黒魔との間合いを詰める。

「もう打たせねーぜ?」

黒魔は背後に回り込んだ少年の方を即座に向くが、振り向いた瞬間に少年の蒼白の拳が黒魔の核コアを捕えた。人間の心臓に筆頭する黒魔の核は、栄光の灯の聖なる輝きを前にし、浄化されるが如くぼろぼろと形を崩していき、後にそれらは天へと消えていった。

「へっ……」

少年は今までの疲れがドツと来て、その場に大の字に寝転んだ。右手の光も疲れに応じ、徐々にその灯も消えていった。その時、人通りのなくなった表通りに、こちらへと近づいてくる足音が聞こえた。その足音は少年の耳元で止まり、その足音のものは少年の顔もとに

しやがみ込んだ。

「お疲れ様、レイくん」

「リナ姉来んの遅えよ〜」

「ハハツ…、ごめんごめん」

ややふて腐れ気味のレイに微笑みかけてきたリナと言う少女は、レイと同じ聖なる軍団に所属する一人で、青みがかったロングヘアが魅力の少女だ。年齢的にはレイより一つ二つ上くらいのお姉さん上には黒で出来たりナの持つ理想的なスタイルにフィットする黒の戦闘服、下には上の服とセットであろう黒の短パン状のもの。腰から純白のスカート状のものが覆っており、その純白の衣類にはレイと同じ花が刺繍されている。

「じゃあ任務も終わったし、帰っか〜！」

今回の二人の任務は特定の品物を調達してくること。任務は聖なる軍団より命じられその任務に抜擢された者が出勤する。任務にはランクがあり、上はSSSから下はDランクまであり、まだ幼い二人に今回託された調達任務はCランクのさして命の危機を問わない程度の任務だった。

レイは疲れた体を起こし、帰路に着こうとした時だった。二人の背後に強い殺気染みた気配がした。その感じは二人の栄光の灯を通じて体の芯へと伝わった。

「え……何？この感じ……」

「リナ姉……、やべーぞ……これ……」

振り返った二人の前には、先程の黒魔とは比べ物にならないくらいの大ささの影が立ちはだかっていた。

第二話 “破龍” 登場！！

突如二人の前に現れた巨大な黒魔^{アザム}。ついさつきまで太陽の光に立ち込めていた表通りが黒魔の陰によって包まれた。

「黒塔魔^{アトウマ}！？」

黒塔魔、黒魔と同じ“霸王”より生まれし化身の一つ。その姿は人の大きさとさして変わらぬ黒魔と違い、二階建ての建造物を優にしのぐ大きさ。数の多い黒魔と違い少数型。出現するのも街中を好まず山などの場所で活動する。

黒塔魔は拳を高く振り上げ二人へ照準を合わせる。ただ力任せの拳が舗装された道を砕く。間一髪のとこで身を退いた二人は栄光^{アクテ}の灯を発動した。連戦のレイの拳の輝きは先程に比べて弱く、か細かった。一方、品物の調達を優先していたリナは体力は有り余っており、両手の掌の中で輝く栄光の灯を深い青に染まる、身の丈以上ある槍を繰り出した。

「チツ、連戦かよ……」

「でもどうする？ 実際、私たち二人じゃ黒塔魔倒すのは……」

「なーに、まだ任務でやり合った事はねーけど問題ねーよ！ 行くぞ！！」

そう言い放ち、拳同士を胸元でぶつけ合い気合を入れると、レイは黒塔魔向かい飛び出した。仕方なしにリナも援護と言う形で参戦するが、結果は見えていた。

リナの援護も虚しく、余力尽きたレイは黒塔魔の巨大な手に抑えつけられ、今にも潰されそうになっていた。

「クッソが……」

さらに力を加える黒塔魔に、レイの体はビキビキと悲鳴を上げ始め、臓器が損傷し吐血も出始める。幼き二人に立ちほだかる絶体絶命のピンチだった。

その時……、一つの輝きが黒塔魔の側頭部で爆発し、黒塔魔の体

は大きく沈み込んだ。

「な……！？」

レイは驚き、輝きの放たれた方に眼をやった。

「よう！生きてるかぁボウズ？」

「は、破龍さん！？」

破龍と呼ばれる男は、無造作に仕上げられたボサボサの短い黒髪に顔の中心を真横に傷跡が入った長身で身の締まった中年男だった。

破龍はレイ達より数メートル離れた、人通り無くなったオリエンタル街を纏う黒のロングコート靡かせこちらへとゆらゆらと歩みよる。

「な、なんでアンタがここに……？」

「……まあいいから黙つとけ、ボウズ……」

そう言い破龍はレイの前に立ち、軽い脳震盪のうしんとうの余韻が残りながらも狂気満ちた黒塔魔が破龍の前に立ちほだかる。

「これだけはよく覚えとけよ……」

怒りが頂点に達した黒塔魔は破龍目がけて禍々しいオーラ纏った拳を大きく振り上げた。破龍は黒塔魔を鋭い眼差しで睨むと一瞬黒塔魔の動きが静止する。そして背に挿してある大剣を抜くと、静かにそして素早く頂点から垂直に振り下ろす。周囲を震撼させるほどの栄光の灯の力が振り下ろされた大剣より凝縮され、一瞬にして一つの斬撃の形を成したものと姿を変える。レイたちも見切れぬほどの速さの斬撃が黒塔魔の体を一刀する。巨大な体は真つ二つに裂かれるとそれぞれ散り散りと浄化され天へと上っていった。危機も去り再び街に平穏が訪れた時、破龍は横目に背にいるレイを静かに見据える。

「……一瞬の油断は……己の全てを奪い去るぞ……！！」

「えっ……！？」

その時レイに向けられた破龍の眼差しは有無を言わさぬ威圧感ある視線、辺りを静寂に包みこんだが、その瞳は悲しげにも見えた。

「まっ……、まだ餓鬼のテメェらには難しすぎたか……」

破龍はクスリと笑みをこぼすと、傍にあった木箱に腰を下ろす。す

ると、さして緊張感もないまま破龍の口よりある一つの事が伝えられた。

「俺は…これからしばらくアルカディア聖なる軍団には戻らん……」

「えっ?」

啞然。懐より取り出した煙草を吹かしながらの出来事であった。

「なっ、なんで!?!」

「ん、まあちょっと大人の事情って事で」

何とも曖昧な回答をし、苦笑いを浮かべた破龍は荷物を肩に担ぎおもむろに立ち上がった。

「……ん、まあ一つだけ言っとくとしたら……」

二人を見据える瞳はその場に緊張を走らせる。秋の終わりを知らせるかのような冷たいつむじ風が街路を吹き抜ける。

「これからが本当の使命の果たし時……って事かな」

「?」

二人はこの時は竜が何の事を言ってるのか解らなかったが、なぜかその言葉は重くのしかかった。

「さーて、そんじゃ俺は行くぜ?」

軽い挨拶。レイとリナはその言葉を聞くや否や、先輩に対しての尊敬を表すお辞儀をした。その光景を見ると破龍は何か思いついた陽にうつすらと笑みを浮かべ、一瞬でレイの耳元に歩みの向きを変えて近寄った。

「リナちゃんの事しっかり守ってやれよ?好きなんだろ?」

「!?!? そ、そんなんじゃねーよ?」

「顔…赤いぜ?」

憎たらしくも笑みを浮かべる破龍を、自分の真っ赤に染まる顔を隠すかのように振り払った。

「まっいいけど……、約束だぜ?」

「ん~~~~~~~~、オウ……」

気付くと空は夕陽に染まり、漂う雲がその陽を反射し、鮮やかに空を包み込む。

「じゃあな！」

そう最後に言っていると、破龍はあっという間に夕陽のかなたへと消えて行ってしまった。

「……ねえ、約束って何？」

「えっ！？あ、いや……お、大人の事情ってやつだよ……」

「……レイ君私より年下じゃん」

「うっ……うっせー！」

第三話 幸と不幸

夜深き頃、レイとリナは聖なる軍団へと帰還していた。まず向かうは司令室。そこには聖なる軍団の名の下において最高権力を持つ、総隊長が全聖人の統帥を行っている。司令室は広く、天井も高く抜けている。高価な赤い絨毯を始めに、豪華絢爛な内装。部屋に見事にマッチした高貴なデスクに高貴なチェア。格式の高さを物語っている。そんな高貴なデスクの上におかれた、一枚の質素な紙切れ。そこに手荒く一つの判子が押される。

「よくやったな二人とも、任務完了だ！」

デスクの向こうに腰がけるは艶の良い華麗なる黒髪を後ろで束ねた女性。その女性の言葉と共に置かれる報酬の入られた数個の小袋。これが啓示される瞬間が一番の達成感を得る。レイとリナ、二人は完全に緊張感から解放され満面の笑みを見せた。この黒髪の彼女こそ、全聖人を統帥する総隊長である。

「歡喜に浸ってる所悪いが、お前たち、明後日にでも任務に出れるか？」

「え？あ……まあ……はい二日後なら……」

そうレイが応えるのを聞くと、総隊長は引き出しを開け、一枚の資料を机の上に見せた。その資料を見て二人は絶句した。

「これって……」

「見ての通り、Aランク任務の資料だ」

Cランク、Dランクが当たり前だった二人の前に突如置かれたAランク任務の資料。二人にそれは眩しいほどの物だった。

「本来なら破龍が単独で受けるはずの任務だったんだが、事情があり破龍がこの任務から外れた。そこでお前達二人と既にAランクレベルの聖人二人との編成軍団で行ってもらいたい」

「お、俺らがAランク任務につきすか！？」

驚きを隠せず戸惑いを見せるが、レイはこの時重大な事を忘れてい

た。その事に気付いたのはリナが先だった。気付く瞬間僅かに栄光の灯が揺れるのを感じた総隊長は自らが言う所を止め、僅かな笑みを見せ口を閉ざした。

「そうだよレイ君！今週から“特別上級任務受注期間”だよ！！」
「……………何だっけそれ？」

あどけない表情でキョトンとするレイを見て二人は拍子抜けするが、総隊長がリナに変わって説明した。

「まったく……………一年に一度、上層部が選抜した数名の者を、その期間中のみ上級聖人と組ませる事によって特別に上級任務の参加を認めれるシステムだ。まあ簡単に言うると少しお高い社会科見学ってことだな」

頬杖をつきながらの説明を終えると、ようやくレイも忘れていた事を思い出したらしく、瞳は輝きだし、高まる気持ちと共にデスクに手を着き身を乗り出す。

「じゃ、じゃあ俺らがその…今回の選抜メンバーってことすか！？」
総隊長は顔の前で手を組みなおすと、一回瞳を伏せ、薄らと笑みを浮かべる少しの間を置きレイに向けて見開いた。

「フン……………レイ・ラグナシア！リナ・クローバー！両二名を只今より選抜メンバーとする！！」

最初、何を言ってるか解らなかった。だが、自然と胸は高鳴りだし

た。
「どうする？嫌なら上に行って取り下げてもらってもかまわないぞ？」

総隊長の遊び心、幼い二人の好奇心に漬け込んだほんの冗談。

「あるかよ……………もちろんだ！選抜メンバー……………ワクワクが止まんねえ！！」

「もちろん私もです！」

その返事を聞くと総隊長は笑みを浮かべると、話を進めた。

「任務内容は既に同伴の聖人二名に伝えてあるから合流後確認するように。任務開始は明朝六時、各自ベストを尽くせ！以上だ！！」

「はい!!!」

高まる興奮を胸に二人は総隊長の部屋を後にし出ていった。

一人残った総隊長の部屋には夜空に浮かぶ星たちと共に月光が差し込む。椅子に深く腰がけ、夜空を見上げていると二度扉をノックする音が聞こえた。一言入室を許可する言葉を駆けると扉は静かに開き、赤髪ロングの一人の若い和装姿の男性が現れる。

「あ、赤鳥あかどり!？」

「お久しぶりです……、夜分遅くのところ失礼しますセレナお嬢様……。少しお耳に入れておきたい事が……」

「お嬢様はやめろ……。それで？」

赤鳥と呼ばれる男は礼儀正しく、半ば頭を下げ、胸元に常時手を添え、そして重い口が話し始めた。

「率直に申し上げます。……“霸王”の封印が僅かではありますが解かれ始めております」

「!？」

総隊長セレナは驚き、乗じて一瞬溢れた栄光の灯の力が背後にある窓ガラスに亀裂を生じた。その亀裂が生じた事に気にも留めず、赤鳥に再度聞こうとしたが自ずとその口を噤んだ。この赤鳥と言う男、実力は破龍と同等なのだが性分なのか闘いを好まず、気ままに出歩いては何かと有力な情報を持つてくる聖なる軍団でも腕利きの情報収集者として知られている。セレナはそれらを考慮したうえでの行動だった。

「掴めたのは……そこまでか？」

「フツツ……、まさか……“霸王”の封印が弱まったことで封じられていた混沌の力が強まり始めています……」

「黒魔アザムがより凶暴になるという事が……」

「はい。それともう一つ……」

その瞬間、亀裂生じていた窓が外より叩く風によって割れ、勢いよく夜風が二人の髪靡かせ、司令室を通り抜ける。

「なに………!？」

風に揺き消された言葉は、これから始まる長い長い闘いの序章にも過ぎない言葉だった。

第四話 特別上級任務開始！！

窓にかけられるカーテンが朝風に乗って揺れる。カーテンが描く波の隙間から一筋の温かい光が、眠りについたまだまだ幼稚な顔を照らす。

「ん、朝か……」

むくりと起き上がり、まだ眠い眼をこする。こそばゆい腹を掻きながらレイは朝日差し込むカーテンを開け放す。雲一つない快晴の任務日だった。レイは簡単に身支度を済ませると、一度部屋を出て朝食をとるため大食堂へと足を運んだ。聖なる軍団内の食堂は凄い世界各地の食材が集められ、それを最高に活かす事が出来る超一流の料理人までがそろっており、日々世界の為に働く聖人の腹ごしらえ、健康を考えた食事を提供している。

「おう、レイの坊主！今日から選抜なんだってえ？」

話しかけてきたのはこの料理長ジャム・ガーデン。超筋肉質で強面な顔とは裏腹に、出される料理は誰もが満足する超逸品である。支給されたであろう料理人たち用の衣装も、ジャムには小さいらしく、なんとか着たは着たものの、胸元がようやく隠れる程度、よってほぼ鍛えられた筋肉が剥き出しの状態である。

「そんじゃあ一応今日が改めての初陣ってわけか！」

「まあな……」

「じゃあアレ食ってくか？」

「いいよ……任務前は腹八分目って決めてっから。帰ってきてから食わせてよ」

そう言うとレイは別の朝食を頼み席へと着いた。任務三十分前、ゆっくり食べても優に間に合う時間だ。そう思いながらレイは食事の手を進めていると、向かいの席に同じように朝食を持って腰を下ろす者が来た。

「どつ？少しは緊張してる？」

リナだった。まだ任務前という事もあり、ラフな格好で朝シャンしたのかほのかにシャンプーの香りがする。そんなリナにレイは食事の手も一時止まり魅了されてしまっていた。

「ま、まあな、リナ姉は？」

「うーん…少し寝不足気味。なかなか寝付けなくてね……」

リナも食事の絵を進めながら話す、度々眠い目を擦り、小さいあくびも混じる。

「なんにしても、精一杯頑張ろうね！レイ君！」

「おお！」

上部は陰に潜むほど高くそびえる出動ゲート。両二枚の分厚い白き扉は黒魔奇襲などの為に嚴重に防衛術式が組み込まれており、そうそうに侵入はできない。一応にも扉の下には専属された門番が二十四時間常時交代で見張っている。そんなやや気まずい空気の中、レイとリナは戦闘服に身を包み、同じ任務メンバーの高級聖人二名を待ち呆けていた。任務内容の資料はその二人が持っているため、レイたち二人は誰が来るのか知らなかった。

「遅っせーなあ…、もう出動時間になんぜ？」

そんな愚痴染みたセリフを口走っていると、出発ゲートに向かってくる二つの人影に気付いた。一人は金髪ショートのなんとなく抜けた感じで顔をほんのり赤く染めた二十歳前後の男性。もう一人は赤みがかつた黒髪のロングヘアーのおなじく二十代前半の胸のやや大きめの女性。

「お！？見なれた顔があんじゃねーのお！！」

「ゲツ…！チサト先輩……！？」

レイも金髪の男性も互いに気付くや否や、レイは自然と体がぎこちない動きを見せるようになった。肩を抱かれるも、顔を合わせないようにし、額からの汗垂れるながらも眼をそらしていた。

「へえ、お前が選抜ね。時代も変わったもんだあ」

「ハハハ、どーも……（酒クサツ……）」

口から漂う酒の匂いがレイの嗅覚を苦しめる。一方、女性二人はレイたち男のやり取りを見て苦笑いを見せていた。

「悪いな、あれが今回のリーダーだ……」

「ハハハ……相変わらずですねチサト先輩も、それに弱いレイ君も」
リナも幼少のころから聖なる軍団に身を置いているためチサトの事はよく知っていた。

「まっ、あれがあいつらの好いところでもあるんだけど……。さて、チサト、時間だ！」

「ん？あゝ了解」

そう言われるとチサトは三人の前に立ち、懐より今回の任務資料を出し、自己紹介を交えての任務内容を説明した。

「俺が今回の軍団^{チーム}リーダーのチサト・ソウで、そっちの巨乳女がユーナ・フィレンチエです」

ユーナと紹介されたロングヘアの女性も毎度のことと慣れていたようで、既に呆れるだけで突っ込む気力も削がれている感じだったが、チサトは反応が欲しかったらしく、笑みと期待こもった視線をユーナに送るが、「任務内容の説明しろ」と言わんばかりに軽くあしらわれる。

「え」と、今回の任務は“^{アクティア}栄光の灯の回収”。エリアはウルジ街だ……」

チサトは資料を読み終わり懐へとしまい、腰ひもを再度気きつく縛ると任務開始の号令を叫んだ。

「軍団チサト！これより“栄光の灯回収”任務のため聖なる軍団を出発する……」

重低音と共にゆっくりと開かれる白塗りのゲート。隙間より吹き抜ける朝やけの心地いい涼しい風が、二人の張り詰めていた気持ちを柔らかかにほぐす。そして、二人の瞳には朝日と同じ輝きが灯っていた。

第五話 不穏なる影？

数個の小さな町を通り過ぎ、深い森を抜けた先には、風の止む事のない峡谷に点在する街、ウルジ街が目当たりになり広がった。既に酒臭さも取れすっきりしてるチサトに代わり、移動中も濃く絡まれているレイは酒の匂いにすっかり酔ってしまい、チサトのお荷物となっていた。森を抜けるとウルジ街が一望出来る丘があり、リナはそれを駆けあがった。

「うーん！気持ちい〜！レイ君も来てみなよ！」

「ハハハ！ダメダメ……、このガキンちよ完全ノックアウト」
「オメーのせいだよ」

悪気なく満面の笑顔で返答するチサトの頭部に、垂直に降下したユーナの強烈なチョップがヒットする。ショートコントの様な二人のやり取りを見ていたり名は苦笑いを浮かべるしかなかった。

その時だった。四人が目前にするウルジ街から、悲鳴とともに一つの爆発音が轟いた。たちまち爆煙が昇り、位置を掴んだチサト達は急いで丘を駆けおり街中へと急いだ。爆発が起きた方から逃げゆく住人とは逆に進むチサト達にはこの爆発の原因には黒魔がいる事が解っていた。普通の人間たちなら人事的、自然的な爆発とも考えるかもしれないが、栄光の灯を有する者たちは肌身を通して黒魔の発する禍々しい気配を感じ取る事が出来る為、疑いの余地はなかった。

「任務絡みの爆発か……？」

「ど〜だか、行ってみなきゃわかんね〜よ。まっ、まずは現場に急ぐこつた！」

レイを背負いながらもダントツのスピードで二人の先陣を切るチサト、さすが上等兵だ。リナがMaxスピードを出しても付いて行くのがやっとだった。そうこうしていると先頭を切っていたチサトはあ

つという間に現場へと到着した。丘の上で見たときよりも火の手が広がっており、一見の建物を火元に周囲の木々などの緑や、数件が火の手に飲まれていた。苦虫を噛み潰したような顔をしたチサトは、背負っていたレイを安全なところへ残すと躊躇なく火の手の中に飛び込んで行つた。そのしばらく後にユーナ、リナも腰に装着してあるホルダーから数枚の護符を取り出し簡易な防災加工の術式を済まし飛び込んだ。

「あ……あの……、リーダー防災術式してなかった気がするんですけど大丈夫なんですか？」

「ん？ああ……チサトか、だいじよぶだよアイツは」

ユーナがリナへ向けて笑みを向けた次の瞬間、周囲の取り囲んでいた日が水も掛けたわけでないのに消えていった、まるで沸点に達した水が蒸発して空气中に消えていくように……。気付くとその火が消えていくのには中心が存在しそこから一気に消えて行っていた。

その中心には体中に炎を纏ったチサトの姿があつた。

「お？おめーらよく焼け死ななかつたな？」

「炎の使い手のお前と違って、私たちにはちゃんと“防災術式”つてのがあるんだよ！」

「へえ……、便利なもんが出来たもんだ……」

チサトの目の前にこれ見よがしに出す防災術式が組み込まれた護符。チサトはその護符をあまり好かない顔で見つめていた。すると気付くと周囲は数字十匹の黒魔に取り囲まれていた。リナは初めて見たその数に驚くがユーナがリナの頭に軽く手を乗せ言った。

「あんま硬くならないよーにな？いざとなつたらすぐさま逃げろ……」

……、それでも駄目だつたら助けてやるからよ？」

軽いウインクを見せると、次の瞬間には真剣な戦いの顔になっていた。チサトは両腕から炎を吹き上げ拳を構える。ユーナは腰に携えていた短剣を逆手に構え、その刀身に栄光の灯を灯す。リナも緊張からの戸惑いから少し遅れるが栄光の灯を換装し槍へとする。

「んじゃあまあ……、まずは邪魔者から退治していきますかあ！！」

レイを残し、三人はそれぞれ黒魔との交戦に入った。

同時刻 ウルジ街上空

足場一つなく両側に崖^{そび}聳え立つ空中で、まるでそこにコンクリでも轆^ひかれているかのように革靴の甲高く響く足音が静かに近づく。その者はその身を黒装束に包み、後ろで結われた長い黒髪を靡かせ静かにウルジ街を見下ろす。

「さて……、栄光の灯潰しとでも行きますか」

第六話 不穏なる影？

気付くや三人を取り巻いていた黒魔アザムの数は優に五十を超えていた。だが、三人にはそんな事をいちいち確認している暇はなく、ただひたすら目の前に現れる黒魔を倒すのみだった。煌々とした炎を自由自在に変化させ、黒魔のタイプに合わせて戦うチサト。飄々と大群の中を舞い、短剣から繰り出される無数の光の刃で黒魔を浄化するユーナ。リナは遅れながらも、自分のペースで淡々と槍へと換装した栄光アクティアの灯で黒魔を貫いていく。

「テメーらも栄光の灯探しかあ？止めといた方が身のためだぜ？」そんな忠告じみた言葉と共にチサトは視線を多数の黒魔へと向けた。挑発にも取れるその言葉に黒魔はチサトへと一斉に襲い掛かる。その瞬間、チサトは笑みを見せる。チサトの足元より半径五メートル程度の紅き魔方阵が広がる。眩く光り出す魔方阵に身の危機を感じた黒魔は身を引こうとするがそんな時間はなかった。

「へっ！人様の忠告は聞いておくもんだぜ？」

静かに人差し指立てた左手を天へと向け掲げる。

「天柱炎渦てんちゅうえんか」

魔方阵の淵に沿い、そこから煌々とする火柱が雲を裂き天高くへと聳える。三人の中で一番の力の主のチサトの集まっていた黒魔は三十数匹。そのうち天柱炎渦に飲まれたのは半数を超し、残るは数匹だった。

一方、ほぼタッグで戦っているユーナとリナ。主体をリナとし、後方からユーナが護符及び短剣を使つてのサポートの戦い方。マニュアル的な戦法を通した二人は難なく黒魔を討伐する事が出来た。

「お疲れさん！よく頑張ったな」

「あ…ありがとうございます」

マニュアル通りに通したといっても、二十匹近い黒魔との交戦の初めてのリナは疲労困憊で息絶え絶えだったが、そんな中でもユーナ

の言葉に笑みが零れた。二人とは少し離れ、一人考え事をするチサト。その眼差しは異様な静けさはなつた街中へと向けられた。その時だった、三人の栄光の灯を通じとてつもなく大きな力を体の芯まで感じた。まだ力の弱いリナはその力に圧倒され、激しい頭痛と共にその場に塞ぎ込んでしまった。心配するユーナも、頭痛に襲われ、足元がふらつき、膝を着く。

「何……これ……!!?」

頭痛が襲うもなんとかその力の元を辿るチサト。感覚を尖らせるとその力の人物像が薄らと浮かびあがった。黒魔とは違う人型で黒装束に身を包んだ男か女、と言う所までしかわからなかった。するとその圧倒的な力の中に混じって、もうひとつ大きくなり始める力の感じがした。チサトはそちらも探ろうとしたが、前者による圧力で探知は途絶えられてしまった。

「くそつたれ……!!」

重い体を引きづりチサトはゆっくりゆっくりとその力の方向へと歩いて行った。

三十分ほど前

「おい、少年!こんなところで寝てつと風邪ひくぞ」

まだ意識はつきりしない中、聞き覚えのない男の声と、軽く頬を叩かれる感覚があった。瞳も開き、ぼやける視界も徐々に晴れていく。

「お?眼え覚めたか?」

眼の前には低姿勢な自分に合わせてしゃがむ、二十代前半の男性がいた。髪を束ね、黒のスーツを纏っており、右目には銀で出来たモノクルをつけていた。レイは口もとからよだれが垂れてるのに気付き慌てて拭った。男は軽く笑い飛ばすと、立ち上がりレイに視線を向ける。

「少年、早いところこの街を出な。他の住人達はさっさと避難しちまっただぜ?」

「ふうん、悪いけど俺はここの住人でもなけりや、避難する気もさ
らさらないんでね」

そのレイの発言に疑問を感じた男は問った。

「……………。どうしてだ？」

その問いにレイはローブで隠れていた右手を出し、蒼白の栄光の灯
を灯す。それを見た男は驚きの表情を見せ、一瞬笑みを浮かべたか
のようにも見えた。

「一応役柄聖なる軍団なんでね！」

第七話 不穏なる影？

路地裏に一人残った黒装束の男。レイは男に避難するよう言い残し、チサト達三人の元へと向かった後だった。家の外壁にもたれ掛かる男は曇り始める空を仰ぎ、嬉しそうに笑みを浮かべると、瞬時にその場から消え去った。

人影無くなつた街中を三人の元向かい走りぬけるレイ。その時微かにだが、幼い子供の声が聞こえた。レイは立ち止まると感覚を鋭くし、辺りを探る。すると少し離れた森林の中に黒魔の影と一人の人間の気配があつた。すぐさまレイは気配のする方へ向かうと、黒魔によつて地面に押し付けられる子供の姿が見えた。危険を察知するとりなやユーナと同じくホルダーから術式組まれた護符を取り出す。一定の栄光の灯の力を添加すると、黒魔向けて術式を発動した。

「^{バクリン}縛輪”!!!」

術式放たれた護符より、黄色く発光した数個の輪状のものが黒魔の体の子供から引き離し縛り上げる。黒魔から解放された子供は息が出来ていなかつた為か、涙眼で激しく咳き込んだ。心配し駆け寄るレイの傍ら、早くも術式を解いた黒魔が立ちはだかつた。

「あゝあ、やっぱ護符って苦手なんだよなあ……」

溜め息を吐き、頭を掻きながらも拳を構え黒魔と対峙するレイ。拳に蒼白の栄光の灯を灯し、強く握りしめ、徐々にステップも刻み始め、臨戦態勢に入る。すると、突然の拘束に怒りを感じていた黒魔は、それぞれの黒魔が持つ特有の能力を^{スキル}発動し、レイに牙を剥き始める。黒魔には主に三種のタイプが存在する。

近距離タイプ……接近戦を得意とし、三種の中で最も好戦的。部位変化で尾を刃に変化させたり、腕力に変化させたりする者がいる。遠距離タイプ……近距離タイプとは対照的であり、部位変化は砲撃可能な銃であったり、高音波での奇声攻撃などを見せる。近距離

タイプの援護役としても活躍する。

確変タイプ……前二種に比べ、圧倒的に数が少なく稀な種類。一見、近距離または遠距離な姿を見せるが、戦闘中に上級種へと進化する可能性を持つ狂暴種。

今回のレイの対峙する黒魔は両腕を巨大な鎌に、背には高速で動く羽を、その姿はカマキリの様に見える。黒魔は高速の羽を活用し一気にレイとの間合いを詰める。鎌で首を狩ろうとするが、その鎌はレイの首を捕えることなく空を切った。攻撃を避けたレイは水平飛行する黒魔と地面の間のわずかな隙間に身を動かし、振りかぶる拳を黒魔の腹部に打ち込む。無防備の腹部に入った拳は、黒魔を天へと突き上げる。奇怪な声上げ苦しむ黒魔にレイはさらに詰め寄る。

「歯あ食いしばれ!!」

拳を強く握りなおすと、帯状に広がっていた蒼白の輝きが徐々に球形となつていき、拳を一回り大きく包み込む。黒魔を下にし拳を振り落とす。

「おおおらあああ!!」

放たれた球状の栄光の灯ごと落ちてゆく黒魔。抵抗するも虚しく黒魔は勢いよく地面に叩きつけられる。衝撃で飛び散る地面の破片に土煙が舞う。相当な衝撃であるにもかかわらず、なお立ち上がる黒魔。そんな黒魔の前にレイは再度対峙した。今の技は相当な体力を使うらしく、さっきまで平然としていたレイは息が切れ、蒼白の輝きも弱々しくなっていた。そんな中、突如黒魔の感覚が大きく変わりレイは寒気を感じた。

「なんだ……?」

次の瞬間、視界閉ざす土煙から放たれる高速の刃がレイの頬を掠める。出血はわずかで済んだが、あともうほんの数センチずれていたレイの首は飛んでいたかもしれない。そんな恐怖がレイの足を竦ませた。土煙晴れ、豹変した黒魔の姿が現れた。

「オロカナ……ニンゲンドモヨ……」

片言ながらも人の言葉を話す黒魔。その姿は人間の平均身長より一

回り大きい姿した、刀持つ侍の様だった。
「オワリダ……！！」

第八話 不穏なる影？

通常の刀とは遙かに違うサイズの刀。その一振りは木々を軽く薙ぎ倒し、木々が倒れるのと共に大量の土埃が立ち昇る。視界は最悪だった。これまで何とか攻撃を回避してきたレイだが、視界が悪いためギリギリまで迫ってからしか確認できず、回避もそれ相応に遅れてしまう。そんな中、闇雲に走っていると、偶然にも先程の少女の元にたどり着いた。

「あ……さっきのお兄ちゃん!!」

「!!!?」

その瞬間レイの表情は険しくなった。女の子一人を守りながら、この視界の中での未知の力もった黒魔との戦闘は過酷険しいものだった。しかし、レイは一つ深呼吸し覚悟を決める。

森一帯を覆っていた土煙が一点から勢いよく晴れる。発動した護符より風が巻き起こる。そこには少女を背に、再び強い輝き取り戻した拳構えるレイが強い眼差し浮かべ立っていた。

「絶つて対守^{てえ}つてやるから、離れんじゃねーぞ!!」

一人黒魔へと突っ込むレイ。少女にはカッコよく決めたものの、内心恐怖は消えていなかった。栄光の灯通^{アクティア}じて感じる力は歴然と黒魔が勝^{まさ}っていた。振り下ろされる一太刀目をすれすれながらも躲^{かわ}すと、枝を利用しさらに高く飛ぶ。ここまでで黒魔のちょうど半分。すかさず二太刀目が襲う。サイドから迫る刃をタイミング良く下へ蹴りつけると、その勢いで一気に一番上まで向かい、黒魔向け拳を握りしめる。その時だった……、背後より一瞬とてつもない力の感じと自分の体への尋常ならぬ痛みがレイの視界に鮮血舞う一瞬の後に襲う。

「あ……あああああああああああああ!!!!!」

レイは大きく削がれた左肩を抑えながら、重力に任される体は地へ

と手荒く落ちた。息荒く、今にも意識途絶えそうな痛みの中、レイは視界を攻撃の仕掛けられた方へと向ける。意外にもその人物はレイの目の前へと腰をおろし自ら姿を見せた。

「悪いな少年……、こつちもお仕事なんでね」

その姿見た時レイは目を見開き驚いた。黒髪束ね、右目にモノクルしたつい先程あつた男だつた。

「な……、なんであんたがここにいんだ……!!?」

「だーから、お仕事って言うてんだろ？」

笑みと共に片目ウインクする男。すると男は立ち上がり、少女の方へと歩む。流れ出す血は地面を這い浸透していく。無力さの前にレイは唇を強く噛み締め、地面を搔く事しか出来なかつた。

至つて現在、驚異的な力持った黒魔と、計り知れない力持った謎の男。少女を残しレイは絶体絶命のピンチに陥つていた。男から放たれる無尽蔵な勢い感じる圧倒的な力。その前にレイは地に屈していた。男は少女抱え、今にでも命獲れるよう、漆黒のオーラ纏つた左手を首元へと翳す。

「さて、目標破壊つと……」

漆黒の手近づけた瞬間、恐怖か、少女は大きく泣け叫ぶ。その時、レイの鼓動が一つ大きく高鳴つた。

「こつちもお仕事なんでね……」

躊躇なく漆黒の手は少女の首を取りに行く。黒魔も男も任務の遂行を確信した時だつた。二者のどちらでもない力が突如大きく爆発したかのように空気を震撼させる。その力の感じに男の手は止まり、力の発信源へと目を向く。そこには黒い力溢れだし、天高くへと黒の柱聳え立たせるレイがいた。左肩からは黒き翼を生やし、拳の蒼白の輝きは消え、渦巻いた黒き力が拳を包む。冷たく、鋭く、先程までの輝きの面影は一切なく、全く別物の力だつた。

「少年はいつたい何者だ……?」

応えはない。男に向けられるは恐ろしいほどにまで恐怖感じさせら

れる瞳だった。

空間を作るのにチサトは予想以上に力を浪費しており、立つのも困難だった。しばらくし、無意識のうちにそつと眠りに落ちたチサトを確認するとリナは立ち上がり自分なりに状況を把握した。

「レイ君……」

しばらく色々と考えたが、いてもたっても居られなかつたりナはチサトが隔離空間を作るのに使用した特殊護符を一枚拝借し、その加護を受けながらリナは森へと急いだ。

全速力で数分駆け抜けると、レイ達のいるほぼ森の中心辺りへと辿り着いた。その光景を見たりナは驚愕し、レイに掛ける言葉も失った。その光景はあまりにも無残だった。既に男の姿はなく、少女の姿もなかつた。あるのはレイによって破壊された黒魔の残骸と、無数の漆黒の剣突き刺され、黒き翼生やした地に身を落とした血塗れのレイだった。数秒の後、我に返つたりナは急いでレイに駆け寄った。

「レイ君！レイ君！！」

混乱し、どうしたらいいかわからないリナはあふれる涙拭うのも忘れ、レイの名を何度も叫ぶ事しか出来なかつた。その時、腹を押さえるようになっていたレイの両腕が動き、幼き少女が出てきた。

「この兄ちゃん、ウチを助けてくれたんだ！」

余りにも幼き少女。赤髪のポニーテールに珍しい蒼き瞳、威勢のいい感じの喋り方。そんな少女が取り乱れたりナの心を僅かながら和らげたのだ。

「レイ君が……？」

「黒づくめの男に襲われたウチをその兄ちゃんが必死に守ってくれたんだ！途中から兄ちゃんの様子が変になっちまったけどそれでもウチを助けようとしてくれたんだ！！」

その話を聞きリナはそつとレイに生えた黒い翼に眼をやった。

「でも……、回復術式もあまり知らないしどうしたらいいか……」

その時だった、黒装束の男も去り力の圧力感から解放されたユーナがチサト抱え合流した。

「無事かお前ら!？」

「私は何とか……。でも、レイ君が……」

視線をレイへと移すとユーナはすぐさま回復術式の準備に取り掛かった。レイを中心に円の形に護符を配置し終わり、取り掛かろうとした時だった。レイの小さくなっていた鼓動が大きく鳴ると、数多の傷口は煙を立てるとみるみる塞がり始める。

「な……。!? 傷口が塞がっていく……?」

驚くユーナは術式起動の手を思わず止め、その光景に眼を取られる。全ての傷が塞がると、黒い翼は左肩に翼の形した黒の刻印として消え、浅黒かった髪はもとの白へと戻って行った。すると、レイはすべての力使い果たしたのか、その場へ前のめり倒れた。

「レ……レイ君!……!」

第十話 不穏なる影？（前書き）

* 編集 *

7月21日 長官 総隊長へ変更。

第十話 不穏なる影？

体に走るわずかな痛みと共にその固く閉ざされていた瞳は開かれた。目の前には顔を覗き込む見覚えのある人影があった。ぼやける視界だが、青髪垂らし、心配そうな顔して見下ろすリナの顔が確認できた。

「……………リ…ナ？」

朧おぼろげな意識の中、その名を呼ぶと、頬に温かいもの落ち、頬を伝った。それは一つだけでなく、続けざまに一つ二つと落ちた。リナはレイの首にしがみ付き、ためらわず思い思い募った涙が溢れ出す。その温もりは虚ろなレイの意識を取り戻し、曇っていた瞳に一筋の光が戻る。

「……………!?」

意識戻ったレイは最初にしがみつきリナに眼をやるが、ずっと見ていると頬が赤く染まって行き、思わず目を逸そらし頬を掻いた。とある部屋の一角にはソファにお互いに肩寄せ合って寝るチサトとユーナの姿があった。そんな光景を見たレイは思わず微笑んだ。

(にしても……………、一体何が起こったんだ?)

そんな事を考えるも一人で考えても埒が明かなかった為、リナの髪を軽くひっぱり気付かせて聞いた。

「リナ姉、何が…あつたんだ……………」

まだ涙浮かべ、鼻の赤く染まったりリナに問う。するとリナは口を噤くみ、ユーナに言われた事が脳裏に浮かぶ。

この事はレイにはまだ言うな！言いたくなるかもしれないが総隊長に話してからでないといけない……………。とにかくレイには安静にさせておけ。

俯き、涙をぬぐってから顔を上げると話題を切り替えるように、リ

ナは立ち上がり部屋の外へと向かった。

「ちよつと待つてて、今何か飲み物とか持つてくるから……」

そう言い部屋を出て行ってしまつと、静かに扉は閉められた。その時レイの心にはぼつかりと虚無感の穴が開いた。ふと視線を降ろし、自分の体に眼をやると何かを隠すように大量に巻かれた包帯に気付いた。最初思考が働かなく、ただ傷を隠すための包帯だろうと思つたが、包帯越しに体に触れるとあの森での光景がスライドの様に脳裏に浮かびあがつた。

「……………」

しばらくの沈黙の後、あの肩を裂かれるような痛みと感触を思い出した。レイは何かに駆り立てられるかのように包帯を解ほどいていくと、驚きと共に言葉を失つた。確かに深い傷を刻まれたはずの肩には治療痕のない傷口が完全に塞がった、異様な光景だった。たしかに近年、聖なる軍団内での医療技術は向上してきているが、あそこまで深い傷をここまでも早く直す手練はそうはいない。気付くと腹部などにも無数の深き傷跡があるがどれも見事に塞がっていた。その時静かな部屋の中にリナが扉を開く音が響き、レイは肩が思わず上下する。自然と今見た傷跡をはおつていた衣類で隠した。

「ごめんね、レイ君。食べ物がすぐに見つからなくて……」

そう言いながらもしつかりと、おぼん上にコップにつがれた水とインスタント式の白米で出来たおにぎり二個を添えて持ってきた。レイの傍らに座ると小さいテーブルに置き、レイにすすめる。おにぎりを手に取り食べ始めるが特に会話もなくなるとなくぎくしゃくした空気が続いた。

「レイ君!!あのね……」

「ふあ~~~~あ~~~~」

ソファで寝ていたチサトがリナの言葉を遮るかのように大きなあくびをした。肩を上下させ言葉に詰まるリナにレイは冷めた視線を送った。

「なに……?」

「う、ううん。なんでもない……の」

再び口を嚙むリナと変わり今度はチサトがレイに話しかけた。まだ眠たそうな目を擦り、ボサボサの髪を軽く掻きながら。

「お？お目覚めかあ！？ガキンちよ？」

アンタがお目覚めですか？だよ……！！

おにぎりを口にしながら横目でチサトを見るレイ。するとチサトはレイの寝ているベットに腰がけ、笑みを見せる。レイはその笑みのわけがわからなかった。

「それにしても……やるじゃねーの？一人で栄光アクティアの灯見つけちゃうんだもんな！」

「は？」

頬に米粒つけたまま、開きっぱなしの口が閉じないレイ。それもそのはず。レイの意識の中に栄光の灯を見つけたなんて意識は全くの皆無なのだから。その時タイミング良く、勢いよく扉が開き一人のものが見えた。

「あっ！！！」

第十一話 不穏なる影？（前書き）

お詫び

ここ最近学園祭準備や期末テストが近いという事で更新がなかなかできずという状況で、言い訳になってしまいかもしれませんが、作品の制度もただでさえ低いのにさらに荒れてしまっています。次回辺りから新シリーズにも入れそうなので外らで挽回したいと思います。

今回の荒さを本当にお詫びします。

追伸

上記の様な事を言っておいてなんですが、感想のひとつも欲しいなと思っと思っていますノノ 悪いところの指摘でも全然かまわないので出来たらよろしく願います。

編集

6月20日 タイトル記述ミスで「WingLeii11 不穏なる影？」を「第十一話 不穏なる影？」に訂正。

第十一話 不穏なる影？

ウルジ街よりやや離れた大森林、木々の隙間から夜空照らす月明かりが暗闇の森を照らし出す。そんな森の中、口に煙草くわえたあの黒装束の男が歩いてきた。レイとの戦闘で乱れた長髪を束ね直し、暑くなったのか、羽織っていた黒いスーツを脱ぎ肩に担いだ。口から煙を吐くとその煙は空へと昇っていくのを目で追っていると背後から聞きなれた声が掛けられた。

「どうやら栄光の灯潰しは失敗の様だなジョーカーくん？」

月明かりに照らされるその姿。同じく黒装束に身を包み、背に大剣背負った赤い短髪の男性。両耳には黒い十字架がモチーフのイヤリングをしており、煌びやかに月光を反射する。それを右目のモノクルより覗くジョーカーと呼ばれる男。赤髪はモノクル越しの視線と目が合うとニカツと笑った。

「いつからいたわけ？」

「なーに、ついさっきさ。こっちもそれなりに仕事があったからね……」

赤髪の男は右の親指で三センチ四方ぐらいの黒いキューブを弾き上げて見せた。それを見せられるや否やジョーカーは赤髪の男を疑う事はなくなった。するとジョーカーは薄らと笑みを浮かべ赤髪に背を向けた。

「ふーん…、ただへマツたってわけじゃなさそーだ……」

「悪いけど俺先帰るわ」

赤髪の男の言葉を遮るジョーカーはなにやら嬉しさ見える表情を浮かべると、体が黒い塵状のものとなって消えて行く。体のすべてが消える間際、ジョーカーは赤髪に一言残した。

「俺たちも…あんまちんたらしてらんねーぜ？」

完全に姿消え、一人取り残された感じ残る赤髪の男。ゆっくりとその足を森の深くへと向ける。

「重々承知さ」

勢い良く開かれた扉。そこにはお盆片手に持ちあげ、もう片方の手でフラフラしながらもバランスを散りながら歩く赤髪ポニーテールのあの女の子。女の子はお盆に乗ってるお茶やジュースを四人に配ると、しっかりと自分の分も忘れず、ジュースを手に椅子に腰がける。

「お疲れ様。シオンちゃん！」

「どーもちびっこ！」

「ありがとなシオン！」

レイ以外の三人、赤髪の女の子への対応にレイは一人置き去り感があつた。あまりにも三人と順応した女の子。

「ほら、ガキんちょも貰つとけて！」

半ば強引にジュースの入ったコップをチサトより手渡される。だが、そんなことではレイの頭の混乱は止まらず、

「オメー…あん時の……」

そう、ジョーカーとの一戦の時記憶はあやふやだが、確かにあのとき一緒にいたあの子だった。

「助けてくれてありがとな！早く元気になってくれよな兄ちゃん！」

屈託のない笑みと感謝の意が込められた言葉がレイの心になぜだか深く染み込んだ。実際のとこ、あの時この子をどうやって守ったかはつきりと覚えていないが、彼女の言葉は嬉しかった。

「ん！それで栄光の灯を見つけたってどういうことだ？」

「あん？テメーが見つけたんだろ？このちびっこごと」

「へ……？」

意味が解らなかった。自分が栄光の灯を見つけた？このちびっこごと？だが徐々に理解できなかった思考も働き始め、ようやく状況を掴む事が出来た。

「こ、この子が栄光の灯保持者って事ですか……?」

「イコール任務完了って事よ!」

ウインク飛ばし、嬉しながらレイの髪をぐしゃぐしゃと褒めるつもりで掻いた。シオン持つお盆にコップを戻すとチサトは一人この一室より出て行った。

「まあガキんちよの傷も大して重くなさそうだし明日の朝にも聖なる軍団に変えるぜ?」

それまでどれほど時間が経ったか解らなかつたレイはその時、開けられた扉の隙間より夜空に浮かぶ満月に気付いた。空を覆う雲間から差し込む月光は淡く、レイの心の心理を表すような気がした……。

第十一話 不穩なる影？（後書き）

第十二話 赤髪の子

月も姿隠し太陽山の狭間から姿見せる頃、軍団チサトは聖なる軍団へと帰還した。聖なる軍団は公には公開されていない島を拠点とし、過去より今現在にいたっても地図にその名が記される事はない。だが人々はその道の島をこう言う……「神の聖域」と。帰還用ゲートには世界最高機関“GOT”より派遣される厳重な選考をクリアしてきた者達、通称“神官”が任務より帰還した者たちを迎える。“GOT”の機関特有の白の生地に赤いラインなどが施される特注の制服。黒魔の襲撃にも耐えられるよう、それなりの防御性を持つチサト達が機関ゲートをくぐると両側に配置された総勢八名ほどの神官が一斉に超え張って言う。

「お疲れ様です！チサト様！ユーナ様！任務ご苦労様でした！」これが決まったの迎え言葉だった。Aランク級の聖人でないレイとリナは省略されるのも決まりの一つだ。機関ゲートをまっすぐ歩いていると最後尾を歩くレイの肩に上る一人の赤髪ツインテールの少女に神官が気づく。

「チ、チサト様……、そちらの肩に乗られる少女はどちら様でしょうか？」

「ん？あー心配スナヤ！今回の任務関係だ！」

「そ、それは失礼しました！！」

徐々に蠟燭の灯火しかなかった通路に電飾の明かりが増え、通路の幅も広がっていく。その通路もしばらく行くと天井も高くなり大講堂といったほどの空間が目の前に広がる。そこには見覚えのある顔もあればあまり見慣れない顔もある。そんな大講堂を後にしチサト達は総隊長の部屋へと訪れた。二度のノックをすると扉の向こうより聞き慣れた声が返される。

「入れ……」

その了承の上、扉を開けるといつもどおり高貴な椅子に腰がける総隊長の姿があった。机の前に横一列に整列させられると総隊長セレナは話し始めた。

「チサト！任務報告を！」

「はい、アクティア栄光の灯回収任務多々の障害が生じましたが無事クリアしました」

「うむ……、詳しくは後で聞かれます……レイの肩に乗るその子供は何だ？」

相変わらず降りる気配がなく、肩に乗る赤髪の女の子。肩の上で暴れられるレイは当に疲れきっていた。

「え〜と……今回の任務対象です……」

「!?？」

申し訳なさそうに言うチサトだが、事実であるためどうしようもなかった。啞然とした顔でその少女を見つめる総隊長。

「よ、ようするにだ、今回の任務対象の栄光の灯にはすでに保持者が存在した言うことか？」

「……………」

無言で頷くチサト。そうなるのも、今回のような任務は最高機関“GOT”より降ろされるものであり、大半の栄光の灯回収任務が原型での回収指定となり、保持者有りの場合はそれなりにそれ相応の対応がなされるが稀に“GOT”の手抜きで、原型での回収と任務内容に記載されていても実際は既に保持者がいたりする場合がある。そのような場合には総隊長がいると面倒くさいらしい手続きを課されるらしい。

「……………!!!」

握りつぶされる資料と共にふつふつと総隊長の怒りが煮えたぎり始める。その間チサト以下四名は沈黙せざるを得なかった。総隊長が怒っているときは本当に恐怖と言葉しかないらしい。以前、まだレイも生まれて間もない頃、ここ聖なる軍団に総隊長に因縁あるものが何年かぶりに訪れたらしい。その二人が会うや否や栄光の灯

を使つての戦いが始まり、この島の四分の一ほどをその戦いで完全に吹き飛ばしてしまつたらしい。

「親は？」

そう聞くとチサトは無言のまま首を振つた。

「……わかつた、とにかくその子はレイに懐いてるようだし、レイ

！当分はお前がその子の親代わりになつてやれ！」

「はい？」

第十二・五話 シルシ

レイ「よ！今回はストーリーとは別に俺たちの世界での専門用語なんかを教えちまうぜー！」
リナ「専門用語だけじゃないよ、書かれていないけど基本的なことも特別に教えるね！」

レイ・リナ「じゃ、レッツ・ショータイム！」

聖なる軍団編

・古の伝記……openingで書かれてる文章はこの伝記の冒頭部分。

・聖なる軍団……かつて勇者が霸王を封印した際に世界でただ一人勇者が有していた

栄光の灯が霸王封印時に再び封印がとかれぬように未来へと託した力を授かった者の集まり。現段階で聖なる軍団内には100名以上の栄光の光保持者がいる。聖なる軍団は国際機関のひとつで、国際機関を束ねる最高機関“GOT”の管理下にある。所在地は公開されず、地図にも乗らない島、世間では「神の聖域」と呼ばれる島にある。

・栄光の灯……かつて勇者が霸王を封印した際に世界でただ一人勇者が有していた

栄光の灯が霸王封印時に再び封印がとかれぬように未来へと託した力。現段階で保持者は100名以上。栄光の輝きが世界にどれほど

あるかはわからないが、日々世界中の探索に労を費やしている。栄光の光といつても上級者と素人が使うのでは天と地ほどの差がある。第五話でチサトが炎を使つての攻撃をしていたが、あれは栄光の光が進化したもの。どれほどまでに進化するかはまだ未知だが、上級者となるとほとんどのものが属性を付与できるようになっている。

・セント聖人……栄光の灯保持者の事。

・チーム軍団……任務に向かう時に数人で組まれる。任務によって一人・ソロ二人・タッグ軍団（三人以上）と振り分けられる。

・任務……最高機関“GOT”より選考された上で下される任務。世界各地へと移動して、目標破壊・採取・調達・栄光の光回収などなどがある。ランクもDからSSSまでである。現在、SSランクには破龍・赤鳥ほかに二名、計四名。Aランクにはチサトと、ユーナ他数名。Dランクにはレイ、リナ以外多数名。

・特別上級任務受注期間……普段CやDランクの聖人の中で“GOT”が推薦した選抜メンバーが、普段受けられないAランクBランクの任務を特別に受けることが許される設けられた期間。しかし、Sランク以上は格段に危険度が上がるため、B以上のものでないといくらこの期間中でも受けれない。

・術式・護符……聖なる軍団内のものに配布される戦闘道具のひとつ。簡易なものは聖なる軍団内のもの以外でも使える用施されている。聖人が使用するのは栄光の灯を消費し使うためそれなりに強度・持続力などが上がる。種類は様々で攻撃・防御・回復……etcといった多くの使用方法がある。日々新しいのが作られ、現在ではその数細かく分類すると130種は超える。

・黒魔^{アザム}……第一話から登場。姿はどの黒魔も全身黒色で大きさはほとんどが人間と同等。先頭タイプが三種類存在する。近距離タイプ・遠距離タイプ・確変タイプの三種。

・近距離タイプ……接近戦を得意とし、ほかの二種より凶暴性が高い。形態変化として、腕を鋭利状・鈍器状に変化させたり、筋肉質の変化などを駆使し戦う。

・遠距離タイプ……遠距離を得意とし、群れで行動する。形態変化には、銃化・魔導化などがある。銃化には銃撃・砲撃・光線^{レーザー}タイプの三種がある。魔導化は自然魔法・呪術などがある。

・確変タイプ……二種に比べ個体数が圧倒的に少ない。二段階に変化する黒魔で第一段階は近距離・遠距離のどちらかに分かれるが、第二段階になると格段に能力が進化し、容姿も変わる。

・黒塔魔^{アツウマ}……固体数は少なく体格は巨大。あまり好戦的でなく、街中などまでいって人を襲うことはなく、普段は山奥や洞窟深部にいる。しかし一変、こちらが攻撃を仕掛けたり敵対すると防衛反応が働き、強靱な腕力で圧倒する。簡単に言うとなら黒魔の延長線上のため、三タイプに分かれるが砲撃なども近接的に使ってくる。実際、黒塔魔はAランククラスでも苦戦する場合がある。

地名編

・ウルジ街……とある溪谷に位置する小さな村。周囲は溪谷で囲まれており、さらに深く迷いやすい森も360度生い茂り観光で来る者はほばいない。溪谷の間にあるという事もあり、一日中涼しい風が吹き抜ける。

第十三話 束の間の休息（前書き）

お久しぶりです。

長い間更新せずすみませんでした。

これからも遅くなる事があるかと思いますがよろしくお願いします。

修正

8月10日 第13話 第十三話

第十三話 束の間の休息

任務報告を終えたレイは自室へと戻っていた。戦闘服を脱ぎ、ラフな格好へと着替えると、任務で張り詰めた気分を和らげるため、森に面したバルコニーへと出た。外へと出ると霧は濃い。この霧は島全体を覆い隠し、近くを航行する船にも気付かれる事はない。普段からこの周辺は静かで、森の奥深くからも鳥のさえずりが聞けてくるくらいだ。レイはそんな静寂とした自然そのものの澄んだ空気を胸一杯に吸い、疲れた心身を落ち着かせる。だが、この日は違った。二つに縛った長い赤髪靡かせ、静寂を破る甲高い歓喜交えた声、そして部屋の広さに心高鳴り駆けまわる足取り。

「兄ちゃん兄ちゃん！！兄ちゃんっていつつもこんな拾い部屋に住んでるのか！？」

そう、レイの腰ばかりの背のシオンだ。

「あー、俺の部屋だしな」

一つ息吐きながら下目に答えるレイ。テンションを上げたいわけではないが、普段のテンションとはいかなかった。任務報告の際に突如任せられたシオンの世話役。「確かに総隊長の部屋を訪れた時、シオンは俺の肩に乗っていたが、別にシオンはリナ姉ともチサト先輩とも親しげに接していたのだから、何も幼いからと言ってても女であるシオンを男の自分に任せなくても……」と言っのが心の中を任務報告終わって今に至るまで何往復もする。レイはふと駆けまわるシオンの衣服へと目が行った。ボロボロで穴だらけとなった布地のローブ。元あった色彩はすっかり落ち、土埃やらなんやらで茶色くなっていた。ウルジ街は近年経済状況が悪く、仕事もあり給料も出るが、一日の食料を何とかするのがどの家も精一杯で、新しい服を買っている余裕もなかったのだ。もともと物資の輸出入が地形の関係もあり不便であった事もあるが、数年前に大都市同士が一つの都市となり、好い利益を求めれないウルジ街への対応が悪くなり、輸

出しているのは赤字の一方だという結論が高地位の者たちによる会議の後、ウルジ街には物資がほぼ輸出される事がなく、物価高騰だの
で困民が続出した。そんな事を思うとレイはシオンの無邪気な行為
に笑みがこぼれた。

「シオン！お前用の戦闘服も支給されたから一先ずはそれにでも着
替えとけよ」

「あ！兄ちゃん初めてウチの名前呼んでくれたな！」

「ん？……そうだったか？」

バルコニーへ通じる窓を閉じ、レイはベットへと足半分乗せず寝転
んだ。シオンは支給された戦闘服の入った白に金一色で描かれた花
が目印のアタッシュケースを備え付けの浴室へと両手で持ち上げ向
かう。

「覗くなよ……！」

「覗かねーよ…ガキの裸なんか……」

「ムッ……」

ゴロンと寝がえりうち、ミニタイプのシャンデリア釣る下がる天井
へ左手を掲げる。ようやく静かになった一室で黒装束の男との一瞬
一瞬を静かに思い出す。再び脳裏へフラッシュバック襲う。

*

低温の雄叫びが広大な森林へと轟く。背後にはバラバラとなった
黒魔の残骸が転がる。爆発する力が蒼白から邪悪な黒となり、一つ
の柱となって天を貫く。意識なくなり完全に別人へと変貌したレイ
の手は殺気向ける黒装束の男へと向けられる。右の手の平に球体と
なっていく黒の力。一定の大きさになったのか、レイの手より尋常
ならぬスピードで放たれる。その衝撃波でレイの背後のものが突風
にでも煽あおられたかのように木々が大きく撓しなる。放たれた球体を男は
躲かすと直進する攻撃は地面大きく抉りながら木々を跡形もなく消し
去り、森を抜けた先にある聳え立つ崖までの道を作った。男はそれ

に眼を奪われていると一気に間合いを詰めたレイが黒き力に包まれた右の拳を放つ。間一髪のところでも男も漆黒の力纏った左手で遮ぎり、力の押し合いとなる。

「グアアアア……!!」

「ツ……やるねえ……」

余裕ある男は力を増幅しレイを弾き飛ばす。形状変え、漆黒の力帯びた手刀にすると一気にレイへと詰め寄る。一度に力の浪費が大き過ぎたのか、反動で体の動きが鈍いレイは成す術もなく、男の力の餌食となる。心臓貫かれたレイの体はガクンツと男の腕にのしかかり、徐々に力が弱まっていく。

「バケモンでも心臓貫かれちゃ訳ねーか……」

ドクンツ

「ん？」

ドクンツツ!!!

レイの体がビクンツと一つ動くと、力なく垂れていた右手が男の腕つかみメキメキと音立て握り潰そうとする。男は慌てて手刀を抜くと、たちまち貫かれた穴は修復された。直後、レイの力が数段に跳ね上がる。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「!!!」

*

「ぐっ……」

激しい頭痛に襲われ、意識は戻される。それ以上の事はその後いくらやっても同じように激しい頭痛に遮られ、レイはやや息も乱れ諦めた。

（あの後……俺は……）

そんな事を気にしているとガチャッと扉が開き、戦闘服に着替えたシオンが出てきた。白いファー付きの赤地のパーカーに、だぼっとした赤地のズボン。パーカーの背には金色の花が大きく刺繍されて

いる。

「お似合いじゃんか」

「へっへっ」

自慢げに鼻下に指やり擦るシオンを見て、レイはその時心のもやもやを忘れられた。

第十四話 二の次だ!!

とある町のはずれ、かつては繁栄の土地ともされていたが今では人影一つとして見えないこの場所、旧名・ロスペリア。今の名フリングス……意は愚かな地。

「だークソツ！何も見えねえ」

そんな地へレイは来ていた。街の明かりさえ無いここは町全体をスモッグが覆い尽くし、一寸先のものさえ見えわしない。足元はいろんな化学物質が入り混じりへドロが溢れ出してくる。そんな中、レイはやみくもに突き進んでいた。

「やつべ……、まじで迷子かよ……」

ブーツに粘りつくへドロを振り払いながらもレイはひたすら進んで行く……。

*

少し離れてフリングス中心部、とある廃墟。乱雑に置き去られた家具等に腰がける聖人たち。任務で来ていたが同軍団チームのレイが逸れはくてしまった事もあり、聖人が任務時に必ず持つアクセサリー型小型無線機で軍団リーダー、フォン・リックウエンが休憩も兼ねレイと連絡を取ろうとしていた。フォン・リックウエン、通称：荒くれりツク。ボルサリーノ被ったセミショートの茶髪の二十代後半男性。瞳は一般的なグレイ色。ピッチリとした戦闘服の上からロングコートトを羽織る。階級はAランク。

「チツ、ノイズが酷くて繋がりがやしねー。何やってんだあのガキ！」

「このスモッグの所為だろ……」

「あん!？」

逸れたレイに嫌気がさし、イライラが募ってるリックのひとり言に

横から口をはさんだのが、今回の任務メンバーの一人であるレイと同じく選抜メンバーのバロン・シュレンチェ。襟足のやや長い黒髪をした少年。Cランク聖人だが、その実力は他者より飛びぬけていてBランクをソロで行っても支障はないといわれるほどだ。ただ、厳格な性格の為、人付き合いがうまくいかず聖なる軍団内でも度々反感をつけているが、全く気にしていない。同時に、同じく選抜メンバーであるサイン・オリハルコン。ライムカラーのショートヘアをし、瞳は珍しいオレンジ色。一人称はボクのボーイッシュな女性聖人。

「バロン…オメエー後輩だろうが先輩には敬語使えって言われなかったか!？」

「……………」
喧嘩腰のリックへ冷たい視線返すバロン。一つ瞳閉じると家具より腰上げ、リックの横を何事もなかったようにスツと抜けていく。その態度に更に嫌気募り、苦虫噛み潰したような顔し一つ舌打ち鳴らす。

(あんのクソガキ…調子乗りやがって……。フン…まあいいさ、いやでも俺に縋り付かせてやるよ……)
サインはリックに軽く会釈していくとバロンについて行った。

休憩終わり廃墟を後にしばらく経つが一向に霧は和らぐ事もなく以前無線機もノイズが続く。バロン、サインを先頭に後ろから不機嫌なリックが歩む形態。今回の任務はフリングスの悪環境を餌にし、変異したといわれる黒魔の退治。なんでも、フリングスのガラクタを物色していた年輩ホームレスが見たという噂が巷で流れ始めている。それに関するのか、最近近辺都市の排水溝や、下水道から鼻を突くような

異臭と共にヘドロ状のものが見られていて、フリングスの影響ではないかとも言われている。そんな、鼻を突くような匂いがバロンたちの周囲にも取り巻いていた。

「それにしてはひどい匂い、ボク鼻が腐っちゃいそうだよ……」

その時先頭を歩いていたバロンの足が止まった。辺りをキョロキョロしながら歩いていたサインは急に止まったバロンの背に軽くぶつかった。

「え、なに？どうしたの？」

「……………霧で見えねえが囲まれてるぜ」

「え！？黒魔……………じゃないよね、黒魔の気配は感じないし……………」

バロンは無言のまま静かに栄光の灯を愛用の大剣へと換装する。次の瞬間、霧の向こうより攻撃が放たれた。バロンはそれを難なく弾くが、弾くや否やいくつもの方向から攻撃が放たれる音がした。

「わわわ……………！」

サインはホルダーより護符、「壁^{ヘキ}」を発動し攻撃を防いだ。バロンも必死で大剣で対抗するが次第に攻撃のすきを突かれ傷が増えていく。サインの発動していた数枚の壁符も次第に罅^{ひび}入り脆くなっている。そして時を見据えたかのように一斉射撃が行われる。

「チツ……………、しゃーねえか……………」

バロンが静かに呟いた。一つ大きく静かに息を吸い、吐き出すと、柄に両手添え一気に栄光の灯を高鳴らせる。すると、蒼白の輝きは徐々に変色し始めた。一方、耐久力の限界を迎えた壁が崩れ去る直前、霧の向こうより見なれた人影がサインと攻撃の間に入る。

「よーやく見つけた！」

放たれた弾は爆発し、その爆風で濃き霧が晴れてゆく。そこには燃え盛る紅蓮の栄光の灯片腕に宿し、刀身細くした紅い柄の刀持つバロンと、渦巻く右腕の蒼白の輝き持ったレイが立ち並んだ。

「迷子ヤローが今頃何しに来やがった」

「うっせ なあ……………、黙ってるよロン毛ヤロー！喧嘩は二の次だ！」

第十五話 高鳴る拳

紅い斬撃と蒼い拳が周囲の敵を圧倒していく。霧が晴れようやく見えた敵の姿は何とも奇怪な体中がドロドロとしたものに包まれ、目もふさがれ残された口からは炎弾が放たれる。その炎弾を対処する中、バロンは己の刀で切る事で攻撃の性質や敵の正体を掴んで行った。

(なるほどな……、だったらまとめて殺^やった方が早いかな……)

バロンは一度攻撃の手を止め、刀を体の前で静かに構えると精神を刀身に集中させた。すると刀が生きてるかのようにヴヴヴ…と唸り始めた。

(いくぜ……、竜刀・芙蓉^{りゅうとう・ふよう}！！)

刀身にためられた熱気が一気に周囲へ噴き出すかのように煙巻き上げる。すると円形だった鐔^{つば}が、三つの花卉のような淡紅色へと変形した。レイ側の敵を除き、周囲を囲む大半の敵の位置を大方把握すると、ゆらりと芙蓉を肩の位置まで構え一気に斜めへ切り降ろす。

「立花炎槍^{りつかえんそう}」！！」

中心の炎より槍状の炎が拡がる。その炎槍は敵へ当るものもあれば外れ周囲へ被弾するものもあった。それでも、数多くいた未知の敵は半数以上姿を消した。それを少し離れたところで戦闘中のレイが見ると思わず目を奪われた。

(すっげ……、バロンのやついつの間にあんな技を……)

そんな事を思うと、胸の中になんだか熱く沸々とするような喜びでもない憧れでもない不思議なものが静かに芽生え始めた。

目を奪われながらも次々に打ち出される炎弾を蒼い拳で対応していった。レイは地道ながらも一体一体拳で殴り数を減らしていった。だが、相手の攻撃を弾きながらも対処しきれない炎弾はかわし、相手との間合いを詰め倒すのにはそれなりに体力が必要だった。栄光

の灯も発動しっぱなしの為、レイの体力は大きく消耗していた。息も切れ、足もおぼつかなくなってきた。

「こいつら……、黒魔じゃねえのかよ……!?」

視線下に、そんな言葉を吐く隙に数体分の炎弾が巨大な一つとなりレイへ襲い掛かる。視界が赤く照らされ、接近する炎弾に気付くが態勢を整えようとした瞬間蓄積された疲労が両足に響き、足は沈み態勢は崩れる。

「やっべ……!!」

瞳をぐつと瞑り、数秒が経つが体に何も起きないのに気付き目を開くと、四角い電子の結晶状のものが散り散りとなりレイの前で崩れてゆく。目を見開きその光景に啞然とするが、そんなレイの後ろから声が掛かった。

「もう、一人で無茶し過ぎだよ……ラグナ君」

短いライムカラーの髪爆風に靡かせ、ゆらゆらと揺らぐオレンジの瞳のサインが、栄光の灯を換装した白に赤いライン数本入った拳銃構え後ろに立っていた。

「ボクも聖人なんだから!!」

「サイン……」

「遠距離戦ならボクにお任せあれってね!!」

そう言うと、拳銃は淡い緑色に輝き出し、サインの栄光の灯銃専用“護符弾”が装填される。引き金に指が添えられると少しばかりか笑顔から戦闘への真剣な眼差しへと変わった。

「ブレイク・バレット“破弾”!!」

いくつもの眩い弾丸が引き金を引くたびに打ち出される。目に追えぬ速度で打ち出される弾丸は次々に目標を捕えてゆき、被弾した破弾は圧縮されていた衝撃波で目標を吹き飛ばした。敵を数秒のうちに一掃してしまうとサインは手慣れた様子でクルクルと銃を回しながら決めポーズをし換装を解いた。

「サンキュな、サイン」

「いえ、レイ君も早く換装できるようになりなよ」

苦笑い浮かべ、笑ってその場を逃れるとレイは敵のいなくなった後の景色を見回しながら疑問に耽^{ふけ}た。

「何なんだあいつら……」

「大方、変異種か新種の黒魔だろうな……」

全体を全て一人で仕留めたバロンが少し離れた場所はこちらに視線を向けず、レイに呆れるかのように目を瞑りながら応えた。

「まあ、なんでか選抜に選ばれた落ちこぼれヤローに、今回の任務は難しすぎたかな？」

その発言にレイの腹が立ち、言い返そうとした瞬間、遮るように再びバロンが口を開いた。

「悪いがこつからは単独行動させてもらうぜ、落ちこぼれ君といるとへたれ菌が感染^{うつ}ちまいそ　なんでね」

背を見せ、大きく跳躍し霧の向こうへと消えていくバロンをレイは眉間にしわ寄せ見えていた。再び視界を遮ろうと霧が濃くなつていく中、レイはバロンに届くか届かまいか、命一杯の大声で言い返した。
「うつつつせ　　！！クッソロン毛　　！！」

息切れるくらいに叫んだレイの気持ちはなぜだか少しばかり清々しく、レイ本人も気づかぬ内に薄らと笑みを浮かべていた。

第十六話 闘いへの思い…、そして始まり

霧に覆われた景色でこの街に来てどれくらい時間が経ったか解らぬが、さきほどまで何ともなかった空気が長袖でも寒いくらいに冷えてきた。おそらく夜も更けてきたのであろう。どうやらこの街の霧は通常のものとは違い気候の変化に伴わず発生しているようだ。そんな中、バロンは単独行動に出、気付くと姿の無くなってリツクの事もあり、レイとサインの二人だけで行動していた。吐く息が白くなる。悴む手を擦り合わせたり息をかけたりと寒さをしのぐようにと自然と動作するサイン。そんな彼女を片目に見ていたレイは近くにあった小さな廃墟を見つけそこへサインを連れていった。

「ど？少しはマシか？」

パチパチとやつとの思いで集めた少ない木片が点けられた火に焙^{あぶ}られはじける音を出す。狭い空間は小さな焚火の火で明るく照らされた。

「ありがとね。ラグナ君」

火明かりに照らされた温かい彼女の可愛らしい笑みはレイのざわめいている心を少しばかり落ち着かせた。それとともに威勢である笑みはレイの頬を赤らめる。

「バロン君もリツク先輩も一人で行動しちゃうし、なんかバラバラになっちゃったね……」

「……………」

焚き木のはじける音だけがするあまりに静かな空間。照らされて出来る影がゆらゆらと壁に映る。

「変な事聞くけどさ、ラグナ君の闘いへの思いって何かある？」

「闘いへの……思い？」

ふとサインと眼が合った。

「うん。ボクはね、ちっちゃい頃この栄光の灯で友達を傷つけちゃ

ったことがあるんだ……。それ以来自分のもつ能力が恐くて引きこもりがちになつたんだ……。でもね、そんな時一人の人が僕をその苦しみから救ってくれたんだ、『君のその能力で今度は誰かを守ってみないか？』ってね。それがね、ボクの聖人としての闘いへの思い……」

揺らめく炎がサインの瞳に煌びやかに映る。サインの言葉を胸にレイも続けようと口を開くがすぐに噤んだ。

「……ごめん、今はわかんねえ……」

悔しかった。サインにはこれほどまでにハッキリとした思いがあるのに仮にも先輩でもある自分にはそれがなかった。膝の上に追いたての拳はギュツと握りしめられ震えた。情けなかったのだ。

その後、そのあと二人には特に何も起きず僅かに朝日が差し込みながらも朝が訪れた。まだ重たい瞼を擦りながらも朝日を浴びるサインの傍ら、すつきりしない思いを胸に眼を覚ましたレイがいた。昨夜、サインが寝静まった後も一人闘いへの思いを考えてみたが、そんな簡単に考えて出来るものもなく、未だサインの質問に答えられずにいた。すると背伸びし終えたサインが明るい表情し声をかけた。

「さ、二人を捜しにいこつか。ラグナ君」

*

時同じくして、聖なる軍団総隊長室

そこには総隊長であるセレナ・リー・エントが腰掛けており、その前には数十名のチサトやユーナ含む上級聖人が招集されていた。総隊長の傍らには長身でカールの掛かった長い金髪を降ろした二十代前半の秘書であろう女性が立っていた。総隊長の背後にある窓からは朝日が差し込む。長く続いていた沈黙は破られ総隊長の重い口が開く。

「結論から言おう、これより、選抜メンバー含むBランク以上の聖

人は“霸王再封印計画”の為、世界各地へと出陣してもらおう!!長期に渡る任務だ!!軍団編成は既にできている、メンバーがそろった軍団より出発してもらおう!!!!”

それは集められた聖人全員の度肝を抜いた。

そう……、この一言が、これから長く険しい闘いへの開戦の合図となったのだ……。

第十七話 起伏の差（前書き）

* 編集*

9月15日

- ・朝日差し込む窓向き背を向ける 背を向けるように朝日を目にする。
- ・一つ一つ全てが 一つ一つが。
- ・「その方の意志を継ぐもの」「霸王の意志を継ぐ者」
- ・数は未知数だが どれほど存在するか解らないが。
- ・サインの後姿を前に サインの後姿を目に
- ・いそいで現場へ急いだ 現場へと急いだ
- ・僅かながら二足歩行もし人型だった 全身をヘドロに覆われており、次々に滴り落ちる。隠れて見えづらいが二足歩行もしている人型だった。
- ・ようやく総隊長は事の経緯を最初から始めた 最初から話し始めた。
- ・信憑性は言うまでもなく疑う余地がないだろう 信憑性の高さは言うまでもないだろう。
- ・時期に総隊長が 直に総隊長が

第十七話 起伏の差

室内は騒然とした。無理もない。数千年間何事もなかった霸王の封印についての任務など誰も経験した事がないのだから、もちろん総隊長とて。一向にざわめきが止みそうになく、そこに総隊長の一喝が入る。一瞬にして静寂となる空間。ようやく総隊長は事の経緯^{いきわづらひ}を最初から話し始めた。

「……………まずこの話の提供者は赤鳥だ、信憑性の高さは言うまでもないだろう。次にだ、この霸王の封印が弱まり始めてる事から黒魔たちの狂暴化も見て取れる。それとだが……………」

ここで総隊長は一度言葉を止めた。聖人たちは疑問に思いながらもあえて皆口をはさまなかった。すると直に総隊長の口は動き始めた。自然と一同の緊張感が高まった。徐に腰^{おもと}がけてた椅子を立ち上がると、背を向けるように朝日を眼にする。

「……………これは赤鳥に聞いた時点では信憑性が薄かったが、チサトとユーナが関わった任務での一件から上での見方も変わった」

その言葉を聞いた瞬間、チサトとユーナの脳裏には同じものが浮かび上がった。

「霸王の下には幾人かの使徒……………つまり勇者の意志を継いだ我々聖人と同類の者…霸王の意志を継ぎし者がいる事がわかった」

「……………!……………」

集められた聖人は驚きを隠せなかった。総隊長から発される言葉一つ一つが驚きだった。普段能天気なチサトもこの時ばかりは大人な表情の上苦虫を潰したような深刻な顔つきだった。

「霸王の意志を継ぐ者たちは今、復活に必要な物なのか、全国各地へと飛びあるものを集めている」

「あるものとは……………?」

「混沌の結晶体……………“漆黒の匣”^{キューブ}だ」

すると総隊長は引き出しの中より数枚の封印札が貼られた箱を取り

出した。その箱から伝わって来るものは禍々しく、栄光の灯と真逆と言ってもいい輝き。封印札を慎重に解いていくと箱は粒子状になり消滅していく。全てが粒子となり消えると、中より封印札越しに伝わって来た禍々しき感じをより実感させられる、所々渦巻く立方体状の漆黒の塊が姿を現した。

「赤鳥が見本として渡してくれたものだ。こうでもしとかなければ時空を歪めてしまふ代物でな……、周囲を覆っていた箱も高等な封印式を組まれた箱だ」

もし今、総隊長が自らの栄光の灯の力で匣を抑えてなければこの時空が歪んでいたという事だ。すると長い黒髪を首元で束ねる一人の若い男が口をはさんだ。

「んじゃあ俺らは霸王を復活させないため、その匣つてのを霸王の奴らより先に集めりゃいいってこんだろ？」

「お前にしては物分かりがいいじゃないかヴェント。どれほど存在するか解らないが……お前さん達なら問題ないだろ？」

総隊長の実弟であるヴェント・リー・エントは言葉聞かずとも解る了承の笑みを見せた。続き、他の聖人たちも各々の意志を言葉なり動作なりで表現した。

「では改めて……」

聖人たちの心が高鳴るのと共に静寂を喫す。

「これより選抜並びに上級聖人は霸王復活阻止のため長期の任務を命ずる！！聖人の誇りを胸に、命を持って挑め！！」

はい！！！！

*

一方その頃、のんきにも大きなあくびしサインと共に行動するレイ。一向に晴れる事のない霧の中をあてもなく闇雲に歩き回る二人懸命に探すサインの後姿を眼にレイは言った。

「なあ、バロンなんて探さなくていいんじゃないの？もともとあい

つの辞書にチームプレイなんて言葉ねーんだしよお……」

「だめだよ、バロン君もボク達の軍団メンバーなんだから」

「へいへい……」

両手を頭の後ろで組みながら生返事を返すレイ。バロンとレイ。この二人は幼いころから聖なる軍団で共に生活してきたが、今に至るまでずっと対抗意識を持っていた。それもレイが一方的にだ。バロンは幼少期から才能を開花し圧倒的な力の差を見せつけた。栄光の灯を制御できるようになったのもバロンが先、任務に出れるようになったのも先、レイがようやくDランク任務に出れるようになった頃にはバロンはワンランク上のCランク任務にあたっていた。既にバロンの眼中にレイはなく、高みを目指していた。それでも、今回のこの選抜メンバーに選ばれた事は嬉しかった。ようやくバロンと同じ位置に立てるようになったのだから。

「ん？そーいやーリックさんはどこ行っただ？昨日もおめーらと合流した時いなかったみたいだけど」

「そーなんだよー、リック先輩も昨日バロン君と言い争った後から姿見なくなっちゃっし……」

「ふん……」

（まあ俺もあの人、何かあればすぐ問題起こすしいけ好かない方だしな……）

そんな自分の感情をお気楽に述べてる時だった。レイたちのはるか前方より激しい爆発音が聞こえたのだ。同時に感じるは昨日の黒魔の気配。二人は顔を見合わせると現場へと急いだ。

走る事数分、現場へと訪れた二人の目の前には傷だらけになりながらも一人剣構えるバロンの姿があった。額からは血が垂れ、ボロボロになった戦闘服、珍しく息も上がるバロン。周囲は黒煙放つ残骸が散らばっていた。

「バロン君……」

「!？」

一瞬バロンの気がサインに獲られた。その隙を狙ってか、視界はっ

きりしない黒煙に覆われた向こうからレーザー状の攻撃がバロンの横腹掠めた。

「ぐっ……!!」

ダメージも蓄積しその場にしゃがみ込むバロン。好機だと続けざまに数発ものレーザーがバロン目がけ放たれる。だがそこはさすがバロンだ。芙蓉で地面を横一線に刻み技名を唱えると、切られた幅と同じだけ煌々とした炎の壁が聳え立った。対象がその壁の破壊に専念してるうちにバロンは壁の裏側より走りだし対象との間合いを一
定まで詰め、芙蓉を振りかざす。

「“炎槍”」

立花炎槍より一段階下の剣技。“立花”とは違い周囲に色がる炎は
なく中心部分だけの炎が相手を貫く技。どうやら演奏は命中したら
しく不気味な呻き声を上げる。するとその対象は煙を振り払い姿を
見せた。昨日の敵とは圧倒的に違うスケール。全身をヘドロに覆わ
れており、次々に滴り落ちる。隠れて見えづらいが二足歩行もして
いる人型だった。ようやくハッキリと正体は意見出来たバロンは、
一気に栄光の灯爆発させ仕留めに掛かる。

「“竜炎・業火……”」

「!!!? バ、バロン待て!!!」

レイは何か気付きとてつもない勢いとスピードで叫んだ。さすが
に技名の途中で大声で遮られると動きも止まるらしく、芙蓉を取り
巻く炎は弱まった。だが、共にバロンは青筋立てレイを睨みつける。
そんなこともお構いなしにレイの視線は一点へ。

「おい……、あれ……リックさんじゃねーか？」

「え!?!」

「!?!」

思わずサインとバロンも視線を今にも襲い掛かりそうな化け物へ向
ける。そこには顔だけがヘドロの中より出た変わり果てたリックの
姿があった。

「ア……ア……タ……助けデクデエ……」

目を疑った。余りにも不気味で気色悪い光景。つい先日まで共にしていた者の姿が変わり果てた姿となって現れたのだから。サインは
涙浮かべ吐き気も催しそうな口元を手で塞いだ。

「ひどい……」

ズシンツと大きな一歩を踏み近づく。

「タズケテクデエ……！！」

第十八話 目覚める力

幼くも未熟な三人の前にはおぞましく不気味な姿へとなり果てた巨大なる肉体持つ者、ほんの数時間前までは共に行動していた先輩であり軍団リーダーであるフォン・リックエン。荒れた気性に残忍な性格、聖なる軍団側からも要注意人物として見られていた。実力は確かで、狙撃の名手として一時期は恐れられた。だが、一つのあの事件をきっかけに、それまで温厚だった彼は変わってしまった。そのような凶悪な男となってしまった。

「フォン……、過去の過ちをいつまでも背負い……成り果ての姿がこれか……」

普段と変わらぬ憎たらしい言葉を吐くバロン、その顔には小馬鹿にしたような笑みが薄らと浮かびあがる。一度は止められたバロンの刃も再び牙をむく。リックの姿に眼を奪われていたレイはバロンの高まる栄光の灯に気付くのが一瞬遅れ、今度は攻撃の手を止める事が出来なかった。

「墮ちたな……フォン・リックエン」

「バロン……」

レイが声掛ける頃にはすでに遅く、リック目がけ大きく跳躍した。取り巻く炎は次第に渦を巻いてゆき、炎の純度も上がっていく。両手で構え、頭上より一気に振り降ろし相手を一刀両断する、現段階でバロンの最も誇れる技が放たれようとしていた。

「目に物見せてやるよ……“竜炎・業火一刃”……」

溜めこまれた栄光の灯を一気に一つの斬撃の塊として刻みこむ。空気を震撼するほどの爆発音とともに、ヘドロに包まれていたリックの体はドロドロと焼けただれ態勢をその場へと沈みこむ。

「グガアアアア……」

耳を劈くほどに聞くに堪えない悲痛なる叫び。業火に焼かれる巨体

は次第に面影が薄れてゆきサイズも縮まっっていく。鼻が腐ってしま
いそんな強烈な異臭。

「やめてええええ!!！」

余りの事に精神を保つてられず涙あふれその場にしゃがみ込んでし
まうサイン。豪快に仕留めたバロンは刀に付く残り火を振り払うと
焼け落ちたリックを背にその場から離れ、何事もなかったかよう
に平静とレイの横を過ぎ去る。だが、レイは黙っでもいられずバロ
ンの襟首掴み怒りをぶちまけた。

「待てよバロン!! なんて容赦なしにリック先輩を斬った!!？」

「……………」

互いの視線が火花散らし激しくぶつかる。バロンは特にどうってこ
とはないが、怒り収まらないレイは歯ぎしりの音が静かに響く。

「何とか…言ったらどうだよ…………!!！」

「……………甘えーんだよ teme は！ 闘いなんざこんなもんさ…………成
功があれば失敗だつてある…生があれば死もあんだよ偽善者!!！」

「……………っ!!！」

悔しくも正論。生きる者があれば死ぬ者も出る…………、それが自然界
の悲しくも必然的な理^ル。返す言葉もないレイは荒く振りほどかれ、
無気力なままに体ははじかれる。ポロポロとなった体を重くも引き
摺^ずりバロンはどこか体を休ませられる場所を探した。乱雑に積み重
なった瓦礫に腰下ろすと、意外と傷が深く動いたたびに血が噴き出し
ていた横腹に、包帯を巻いた上に治療用護符を貼り処置を済ませる。
(俺……………何やってんだろ……………)

一人佇^{たたず}むレイ。その拳は強く握りしめられ、震え、悔しさに満ちて
いた。静寂とした空間。三人共に黙り込み、その静けさがよりレイ
の心へと深く刺さる。

その時だった。一瞬レイの耳元を何かがあるものすごい速さで通り過
ぎて行った気がした。その僅か数コマ秒後、バロンの体は爆発と
共に吹き飛ばされた。鮮血が宙に舞い、その光景を見たサインは急
いでバロンの元に走り、ギリギリのところまで体の下に潜り込むと自

分の体をクッション代わりにして受け止めた。数秒もすると、意識ははつきりと戻り、足元はふらつくが再び刀を取りて牙をむく。今度はサインも。それぞれ手には覚悟の形を武器とした栄光の灯が握られる。

「いくよ！【白薔薇の破魔弓】！！」

姿はなお銃、だが、昨日の時とは姿が違う。銃身は細く長くなり、純白が全てを包み、漏れ出す栄光の灯の輝きには深紅のラインが混じる。その姿は全てを浄化するかのごとく美しかった。

「バロン君、一つだけ言っておくよ……」

「……………」

「確かにバロン君が言った事は正しいかもしれない……でも！ リック先輩の命はまだ救える、いやボク達が救いだす！」

一応は心に留めたようだが、返事はないままバロンは駆けだす。一方、真横を弾丸が通り過ぎたというのに、微動だにしないレイ。多くの事が積み重なり、戦闘になど参加できない放心状態だった。

サインの言葉を聞いてか、先程の様に大技を繰り出す事はなく、簡易な斬撃を打ち込んでいった。隙を見てリックと同じ狙撃タイプのサインは、浄化作用の強い“白弓”^{シラヒメ}を打ち込んでいく。“白弓”は攻撃性は低いが浄化能力には長けており、よく任務でも黒魔の瘴気によって立ち入りづらい区域にも、特定の弓矢を打ち込めばその近辺は浄化され立ち入りやすくなる。その事を利用し、黒魔に飲みこまれてしまったリックを浄化する試みに出た。打ち込まれることにリックは奇怪な悲鳴を上げ苦しむ。黒魔の体にはこの白弓は毒なのである。だが、さすがはAランク聖人だ。黒魔に取り込まれようがその実力は健在。黒魔の力で強化されたこともあり、リックの栄光の灯武器である二丁拳銃型【余波の輪舞曲】^{ロンド}はその姿を露わにする。双方、深い青が塗装されており、右の銃はロングバレルの連射型銃【郷愁】。左の銃は銃身の短い大口径銃【角笛】。それぞれ売りは相手を錯乱させる超連射に、一撃で戦いの流れを変える超火力の銃。共に、三段式のトリガーが発弾形式を変える。

「角笛第二段・拡塵”！！”」

言葉発さずとも黒魔の中で生きるリックの意識が輪舞曲の性能を奇しくも生かす。芙蓉で接近戦に挑んでいたバロンの体は、発される拡散式の銃弾に防御するも弾き飛ばされる。近距離の邪魔がなくなつたところで、もう片方の郷愁がサインを狙う。

「郷愁第一段・隼^{ハヤブサ}”！！”」

音速で打ち出される数十発の弾丸が一齐にサインの体を赤く染めていく。悲痛な叫びが少し漏れる。だが、サインは倒れなかった。むしろ、郷愁の全弾が撃ち終えられた後のわずかなりロード時間を狙い、それなりに浄化性と俊敏性、攻撃力も兼ね備えた銃弾が撃ち放たれる。

「これで　！！　“九頭竜^{くすりゅう}一頭・白羽^{しらば}”！！”」

風を斬る音鳴らしながら超低空飛行でリックへ迫る。ある程度の距離まで迫るとサインも行けると思ったのか、笑みがこぼれる。だが、あとほんの数センチという所で角笛の弾丸が白羽を地面へと粉碎した。サインの笑みは悔しさへと変わる。そんな墮ち込む暇もなく、瀕死状態のバロン後にしてサインへ一気に接近すると、ほぼ眼前で角笛が構えられた。

「！！！！”」

「角笛第三段・烈閃”！！”」

爪が空を裂くように三本の超高密弾が赤い尾を引きサインの横を掠めた。だが、サインはともかく、撃ち放ったリック本人も眼を皿にしてその光景を疑った。本来ならこの近距離で外すわけがない攻撃がある一つの障害により防がれたのだ。金色に輝きし三つの輪を備え、漏れ出す金色の輝きは形成され、肩より菱形^{ひしがた}形状にのび、その姿は羽のようにも見えた。

「バロン……君？」

第十九話 追憶の彼方に

空気は震撼し静寂へと浸る。

リックの砲撃防いだ右腕はサインの前へと掲げられる。ゆらりと爆風晴れるそこには右腕一つでリックとサインの間を介す、どこことなく雰囲気変わったレイの姿があった。

「……………」

リック含みその場の者、皆が言葉を失う。右手より四方八方へと伸びる帯状の輝き。肩より生える三つの菱瀉状の輝き。最初に静寂を破りしは黒魔に取りつかれたリックであった。

「なっ……………」

だがその言葉は有無なくして遮られる。

「成形」

鋭く光る眼光と共にレイのポツリと呟かれた一言を兆しに、周囲へと伸びていた輝きは右の掌へと渦を成すかのように集まり始める。次第にそれは一つの球形を成していき、体の芯へも響く定住音が周囲へと広がる。

「一点……………集中……………」

刺さる眼差し。それはしつかりとリックを見定める。高ぶり大きくなる栄光の灯と共にレイの脳裏に次々にあるものが蘇る。

レイ・ラグナシア！リナ・クローバー！両二名を只今より選抜メンバーとする！！

完全なる球形となったその輝き、掌の中に拳大の黄金の球が一つ、それを包むようにリング状のものが一つ。眩いほどの輝きを放つ。

悪いな少年……、こっちもお仕事なんでね

う、ううん。なんでもない……の

……わかった、とにかくその子はレイに懐いてるようだし、レイ！当分はお前がその子の親代わりになってやれ！

はい？

恐怖。それを体で感じ取ったリックは気付くと後退りしていた。自慢の銃構える両腕も突如豹変したレイに怖じ気づき、引き金を引けないほどに震えていた。

「なんだ……コイツは!!!?」

「歯あ……、食いしばれよ……」

静かなる忠告。それはまた更にリックの恐怖心を狩りたてた。もうそこに、かつてのあのリックの姿はなかった。

ラグナ君の闘いへの思いつて何かある！

甘えーんだよ！闘いなんざこんなもんだ……成功があれば失敗だってある……生があれば死もあんだよ偽善者！！

レイの右足は砂散らす音と共にしつかりと地面踏み締める。体中の力がその拳へと集まる。さっきとは打って変わり、けたたましいほどの超高音を鳴らし右の拳は前へと向けられる。高鳴る気持ちは最高潮へと達する。

一瞬の油断は己の全てを奪い去るぞ！！

「うううおおおおあああああああ……!!」

破龍の言葉。その一言と共に全身全霊の拳が振りかざされる。恐怖

に満ちた体は動かすこともできず、一分の狂いもなしに直撃。超高密度の一撃、黄金の塊は悪しきものに染まったリックの心の蔵を捕えた。狂気なる叫び、リックの体には身が蒸発するかのような痛みが襲う。だが、これで終わりではなかった。心の蔵を捕えた一撃は、リックの体と球体を包むようであったリングが平行になると、リングは超高速回転を始め、遠心力を持ってか次第に輪は大きくなる。一定の大きさにまでなるとレイの手より投げ放たれ、リックの体は黄金の球体と共に風を切る速さで吹っ飛ぶ。霧の彼方へとあった廃墟に大きく衝突したことでようやく勢いを失くしたリックの体は、その場へ瓦礫と共に崩れ去った。

啞然。サインもバロンも開いた口が塞がらぬまま、ただただその光景を目の当たりにした。徐々に輝きは収縮していくレイの栄光の灯。拡大していたリングも元のサイズへと戻ると、高ぶっていたレイの心音も静まり始める。

「ラゲナ……くん？」

心のどこかで少し怖いと思ったサインは恐る恐るも思わず声をかけた。レイの体が急にこちらへと向こうとしたところでサインは僅かにビクツと肩が上下した。

「ごめん……！」

「へ……？」

突然の事にサインは驚きを隠せなかった。深々と頭を下げ、レイは顔を上げぬまま話し始めた。

「俺……今回、選抜メンバーに選ばれてホントに嬉しかった！やつとバロンと同じ場所に立てたって！でも……ホントは選抜メンバーに選ばれた事で浮足立ってたんだ……！自分の力を認められたと思つて自分の力を過信して……未熟さに全然気付かなかった……！」

「……………」

「一人で勝手に突っ走って、軍団のみんなに迷惑かけて……、本つつつ当にごめん!!」

「ラグナ君……」

「サイン……昨日さ、俺に“闘いへの思い”が何か聞いたよな……。俺あん時応えられなくて、あの後一晩中考えたんだ、でも、応えは出てこなかった。でも今なら応えられる気がする」

最後の一言を言い終えるとレイは真剣な眼差しし顔を上げる。そしてその眼差しはしっかりとサインを見据えた。

「俺の……闘いへの思いは」

レイが思いを伝えようとしたその瞬間、それまで感じなかった新しいもう一つの力が体の芯へと深く染みわたった。三人はリックがいるはずの崩れた廃墟へと眼をやった。だが、そちらの方向からは弱り切ったリックの力以外感じなかった。

「……？」

「どうしました？何かお探し求めですか？」

「……!!?」

ふいに背後より掛けられた聞き覚えのない声。そこには一人の男が立っていた。身の丈は優に190センチは超えており、全身を白衣と内より見える黒一色が包む。気の抜けたような顔、丸眼鏡。寝癖をそのままにしたかの様な緑色の短髪。普段なら聖なる軍団内においてもおかしくはない容姿だが、場合が場合だ。任務中の上に、リックの突然変異後の戦闘……何かしら今回の件に関わってるんじゃないかと、その男から発される不気味なほどに大きな力がそう思わせる。

「誰だよ……テメエ」

「フフン……、私はジャガー・クリプトン。通りすがりの研究者ですよ……とは、いきませんかよ？」

「……たりめえだろ」

丸眼鏡の奥より覗く不気味な笑み。その時、立っ続けに力の大きい者の感じを捕えた。だが、それは感じ覚えのある力で、それは先程

まで三人が目をやっていた瓦礫の下より這い出てきた。

「ガア、アアア……」

衣装は血染めとなり、体からは浄化が始まった黒煙が体より天へと伸びる。そして、銃握った手は再び構えられ、レイたちへと再度牙をむく。そこに、簡易ながらも回復済ませたバロンと、栄光の灯発動し直したレイが詰め寄った。

「バロン！リック先輩はまだ救える命だ……、手は出すなよ」

「フン……、同じ事を一日に二度も言われたかねーよ」

「え？」

バロンは足へと栄光の灯を集中させ加速する。「手は出すな」その忠告を早々と破るが、バロンなりの協力だったのかもしれない。

「悪いな……リック先輩！」

レイは先程技を打ち込んだ心臓部分に再度手を当て、攻撃でない栄光の灯の力を注ぐ。

「黒魔の核を破壊する！！……リック先輩、アンタも聖人なら最後まで黒魔と戦って魅せるよ！！」

澄んだ輝きが、横たわったリックの体へと流れる。すると、それまで意識が遠のいていたリックが、呼応するかのようになり、聞こえるか聞こえないか位の細かい声で呟いた。

「……ま……ま……さえ……ろ……」

「！？」

「そのまま……黒魔の核を抑えてる……！俺の栄光の灯で……浄化する……！！」

「オウツ！」

するとレイの黄金の輝きとは別に、リックの体より放出される、藍色の輝きが核を抑え込もうと動く。次第に体より浄化された黒い物が天へと昇り始める。

「オオオオオオ！！！！」

共に力を最大限に放つ。

しかし……希望の光が僅かにも見えたその時、サインの背後に残

つっていたジャガーと名乗る男が不気味な笑い声と共に牙をむく。

「フフン……、悪あがきもいい加減にしておきなさい……クソツたれ聖人ども!!」

「えっ……?」

その言葉を合図のように、リックの様子が一変した。栄光の灯は急激に弱まり、意識も薄れていく。

「が……あ……」

次の瞬間。まるで風船が破裂するかのようにはリックの体は内部より無残に飛び散った。おびただしい血を纏う肉片が周囲に転がる。至近距離にいたレイは体中に大量の返り血を浴びた。数秒レイの動作は完全に停止し、自分の感覚全てを持って何が起こったのかを必死に理解しようとした。

「いい研究材料になりましたよ……フォン・リックウエン」

いつの間にかリックの元、レイの側へと歩みよっていたジャガーは飛散した肉片やらを白い手袋仕立てで興味深そうに採取し始めた。すぐ横でその行動が行われていたレイは、ありのままの感情を右腕……いや、体中から爆発させた。

「あああああああ!!!」

先程リックに打ち込んだのとは比にならないほどの巨大の黄金の球体が幾重もの激しく巻く渦纏い、ジャガーに向けて放たれる。爆発する力……それは人間が持つ一つの感情「憤怒」より生まれしものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0553t/>

Wing Lei

2011年11月15日19時58分発行